

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 6
発行日 / Pub. date	1993, 6
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。



# 1992年度設計製図第Ⅱ(2年生)優秀作品より

This year's outstanding 2nd-year studio work: Autumn Term

ここに紹介するのは東京工業大学建築学科での1992年度後期の「設計製図第Ⅱ」(2年生対象)の優秀作品の一部である。後期の課題は、「低層集合住宅」「矩計図のコピー」「大学会館」「住宅のトレース」であり、ここでは第1課題と第3課題の優秀作品の一部を掲載する。

志水英樹(建築計画第3講座・教授) 藍沢 宏(建築計画第3講座・助教授) 鈴木信弘(建築計画第3講座・助手)  
 Hideki Shimizu, professor Hiroshi Aizawa, associate professor Nobuhiro Suzuki, assistant

## project 1

### [低層集合住宅]

Low-rise Housing

#### ●テーマ設定

同潤会によって昭和2年に建設された「代官山アパート」(旧渋谷アパートメント)の敷地の一部を再開発し、低層の集合住宅を計画するものである。

かつて同潤会は、都市の幅広い一般大衆の住居を対象とするうえで、単なる住宅プランを提案するだけでなく、そのなかでどんな社会、どんな生活の姿をつくるのかという、今後の都市住宅のモデルとして意欲的な提案をしたように、その同じ敷地に「現代の集合住宅」なるものを提案してもらうことを目的としている。作業が平面プランの計画に終始しないよう、傾斜地、旧アパート群との隣接地、集合して住まうといった条件を与え、敷地と住宅の両方を意識させるよう試みた。

#### ●設計条件

計画戸数15戸以上、各住戸は建築面積60㎡以下、延床面積120㎡以下。住戸の組み合わせは自由、階数は2階あるいは3階とし、地階は認めない。構造は鉄筋コンクリート壁式構造とする。

#### ●所用図面

図面はA1ケント紙に仕上げる。

- 1 全体配置図 1/300 方位、植栽、床仕上を表現
- 2 各階平面図 1/50 寸法線、室名、家具配置を記入
- 3 断面図 1/100 1面、各高さ関係を記入
- 4 立面図 1/100 2面、周辺と一体的に表現
- 5 設計主旨 設計意図を箇条書きで3つ記入

仲 胆  
Makoto Naka





# 1992年度設計製図第Ⅳ(3年生)優秀作品より

This year's outstanding 3rd-year studio work : Autumn Term

ここに紹介するのは東京工業大学建築学科での1992年度後期の「設計製図第Ⅳ」(3年生対象)の優秀作品の一部である。本学期的課題は、第1課題の「低層集合住宅」、第2課題の「既成市街地における複合建築」であった。

## project 1

### 〔低層集合住宅〕

Low-rise Housing

## 講評 非常勤講師 W.デューリング

課題は注意深く山下先生により準備された。はじめはヨーロッパの建築家として、敷地や住宅の狭さに驚かされたが、これが東京で標準とのことであった。しかし私自身が東京で6週間、親切で礼儀正しい人びとの間で暮らすうちに、この高密度な都市での生活に対する理解と愛着が深まってきたように思う。

東工大の3年生の独創性や技術のレベルは、私の勤めるアーヘン工科大学の学生と同じであり、講評会で見せてくれた作品がそのことを証明している。ただ、東工大では1年に4(6)課題もこなさなければならないのに、アーヘンでは2課題である。しかし、アーヘンでは理論面の学習がより多いように思う。

また、日本の学生は実際の建設にまつわる物理的側面について、ドイツほど考慮する必要がないのでその分恵まれている。ドイツでは省エネルギーのための厳しい法律があり、断熱対策が幅をきかしており、建築のあり方を変えてしまっている。それに比べ日本では、シンプルなディテールですむので形がつくりやすく、建築家にとって好都合である。

今回の授業は、建築家としても教師としても、楽しく有益なものであった。若い東工大の学生諸君が、将来有能な建築家になることを望むとともに、彼らの礼儀正しさが、都市計画や建築設計の面でも発揮されることを期待している。

(略歴はP24参照)

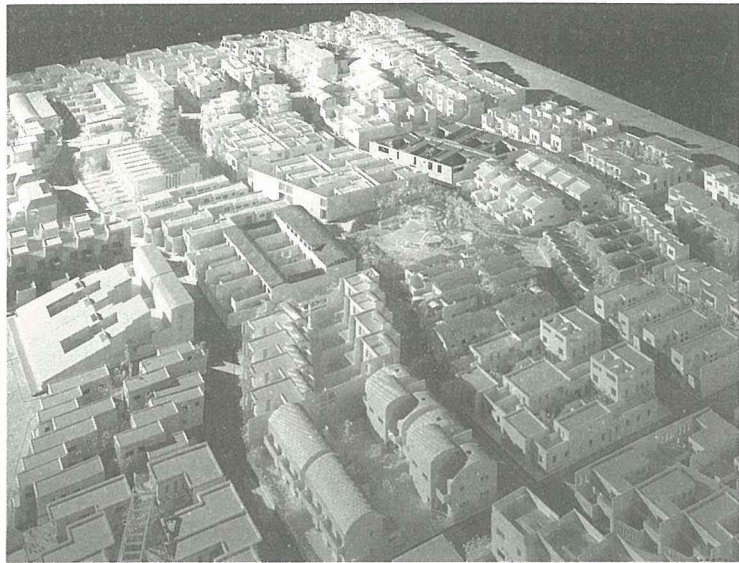


photo : Nakasa & Partners

- 第1課題：山下和正教授，W.デューリング講師
- 期間：10/1～11/19
- 課題主旨：大都市近郊の住宅開発地に連棟形式の低層集合住宅(戸建は不可)を8戸設計する。
- 想定敷地：全体敷地面積(8戸分)は1152㎡。1戸あたり敷地面積128～160㎡。街区の形状は2種類よりなり、その内のひとつを各学生に与える。全体

としてひとつの街ができてあがる。

●住戸規模：1戸あたりの延べ面積95～130㎡。4LDK, 5LDKを中心とし、一部は3LDKも可。駐車台数各戸に1～2台。

●主な法規制：第1種住居専用地域、建蔽率50%(角地60%)、容積率80%、防火地域の指定なし、日影規制(4時間, 2.5時間, h=1.5m)

## 講評 教授 山下和正

今回は、デュッセルドルフを中心に活躍中の建築家ヴォルフガング・デューリング氏(アーヘン工科大学教授)と共同授業を行った。ドイツは社会政策としての集合住宅づくりが進んでいて、実用的なレベルでの住宅の質が高く、市民や建築家の意識も日本と異なるものがある。日本の最近の学生は住宅に関心がうすいので、面白い組み合わせとなるのではと期待した。案の定、デューリング先生は学生のスケッチにおける生活のリアリティーの欠如に少々驚いたようであったし、当初のデザインチェックは、使える家かどうかというデザイン以前の基礎的な問題に費やされた。しかし、学生諸君も徐々に生活感やスケール感を把握しはじめ、後半には面白い提案が数多く生まれるようになった。

この課題の設計条件は、日本の郊外住宅地

の中では比較的恵まれた内容であるが、デューリング先生はやはり厳しすぎると思われたようである。もちろん、敷地面積や延べ床面積の条件を緩めれば、学生諸君も計画しやすく、全員がハッピーかもしれないが、それではやはり意味がない。低層建物であるから、組積造という必要壁量の明確な構造方式を条件づけ、壁量や壁バランスにも配慮してもらうこととした。ちなみに多くの同様な他大学の設計課題において、構造的チェックがなされている例は、私は見たことがない。

このような計画で多くの学生諸君のきまっておちいる問題は、コミュニティ生活を極端に大きく考えがちな点で、代わりにプライバシー確保をまったく考えない案が生まれる。住宅はやはり自分の日常生活の感覚からスタートして考えてほしい。また駐車・日照など、十分に配慮のゆきとどかない案も多かった。

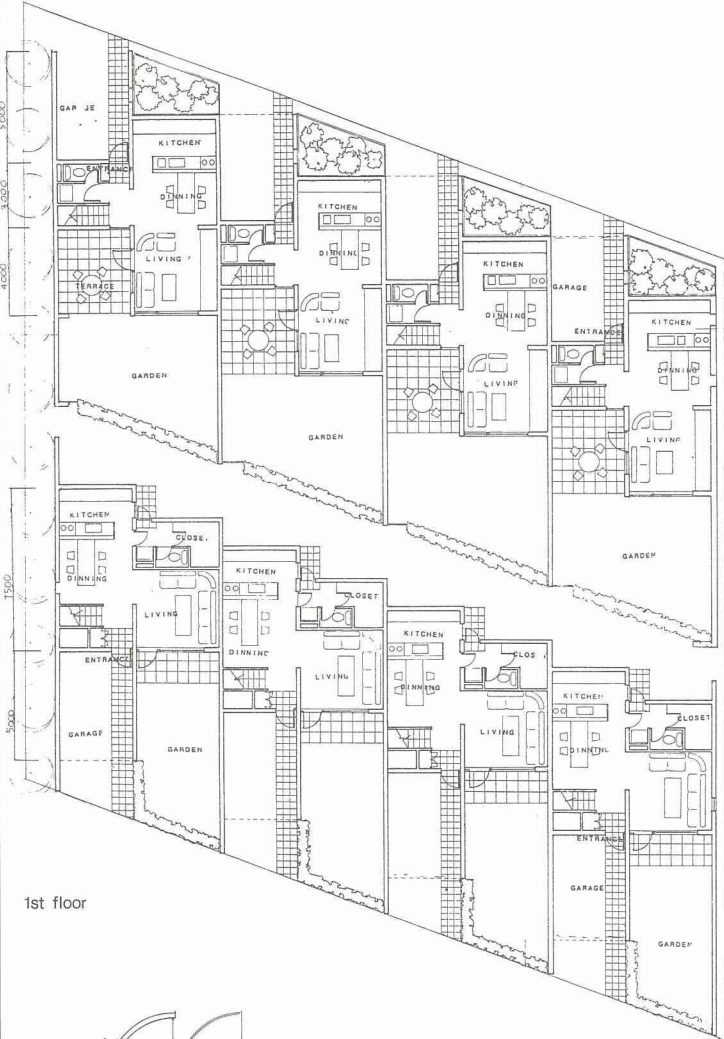
恒例となった講評後のビアパーティーは大いに盛り上がった。

# 低層集合住宅

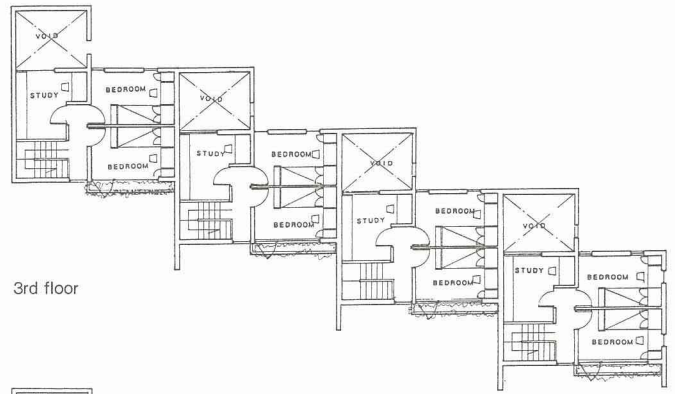
Low-rise Housing

松原敏子

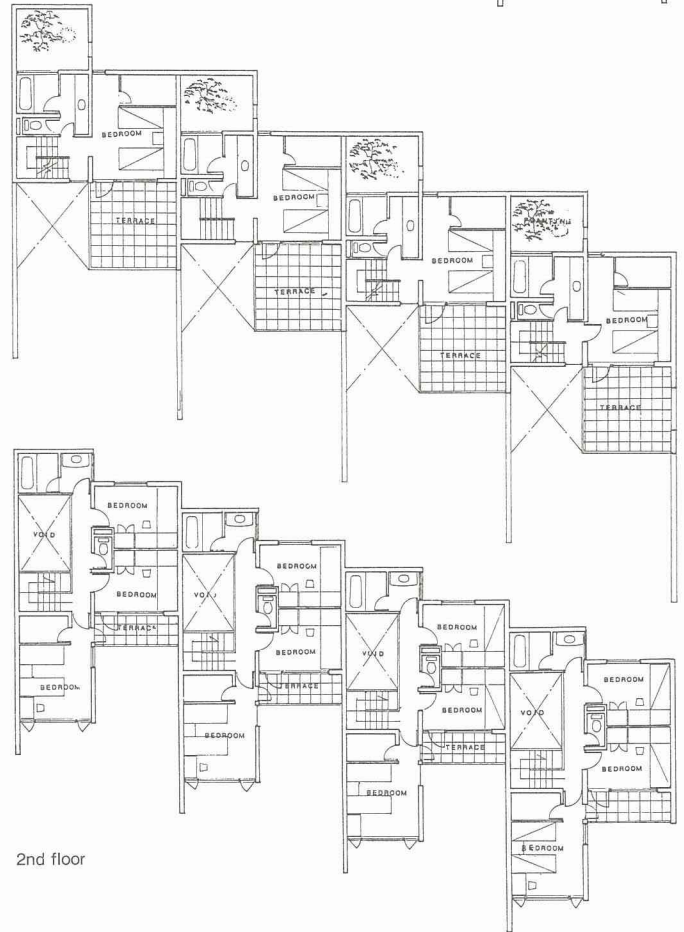
Toshiko Matsubara



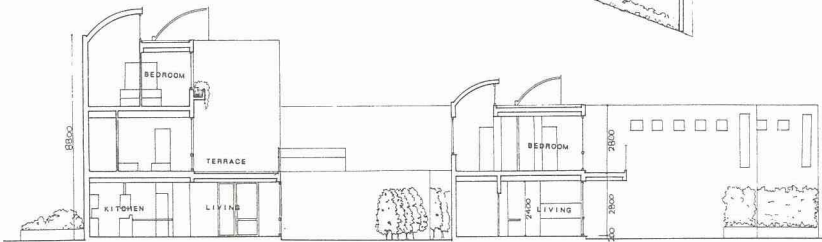
1st floor



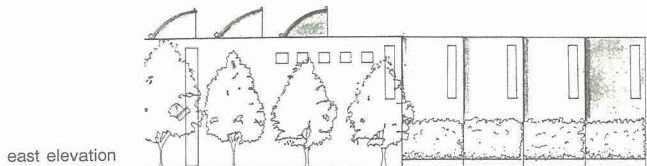
3rd floor



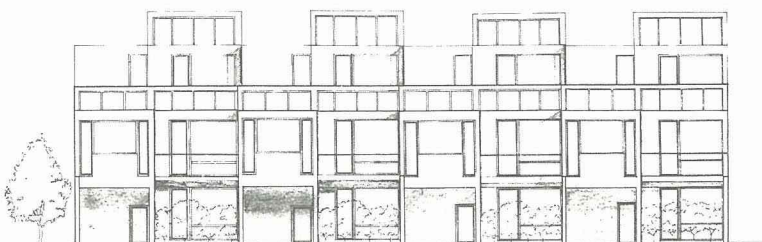
2nd floor



section



east elevation



south elevation

■敷地は均一に区画された住宅街の一画にあり、三方を道路に囲まれている。そのため静かで落ち着いた場であることを考え、東方向に壁を巡らせ、南北方向には植栽を施し開鎖的な空間とした。■この結果内部では各戸とも広々とした庭と大きな開口部を提供することができた。また道路沿いの風景が単調とならないように、それぞれの壁面に変化をもたせ、内部の楽し気な雰囲気創造させるように考慮した。■そしてこの壁面を貫き、西方にある歩行者用道路とつながる場所の東西方向に歩行者専用道路を設ける。ここが唯一の公共の場であり、住民同士の楽しい憩いの中心となることを期待している。■この通路によって南北に分かれたそれぞれの住戸群は、各部屋ともできる限りの日照を得るため、南面は2階建、北面は3階建という配置をとった。

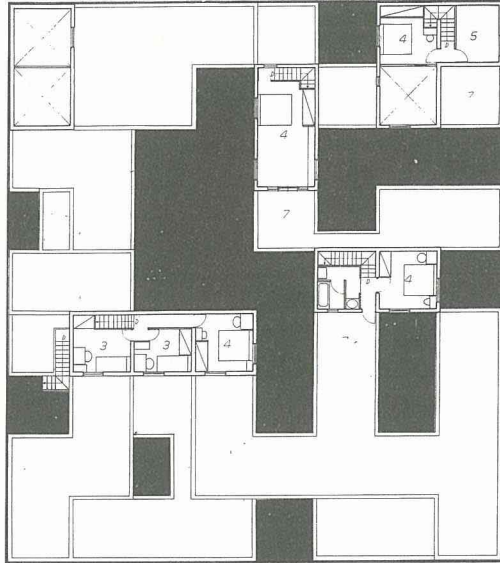


# 低層集合住宅

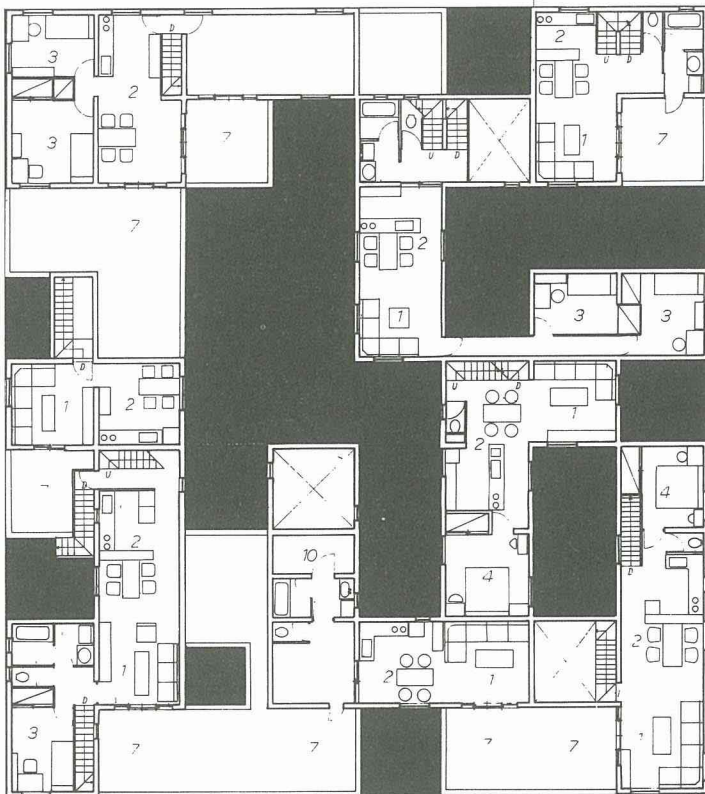
Low-rise Housing

山下 毅

Tsuyoshi Yamashita



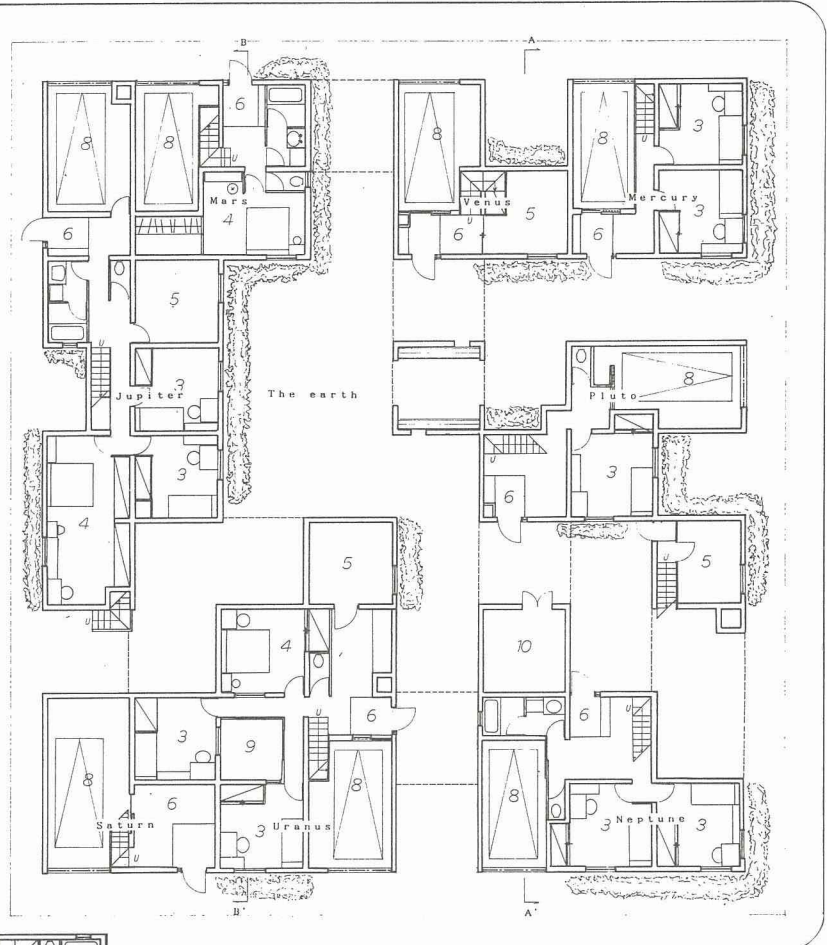
3rd floor



2nd floor



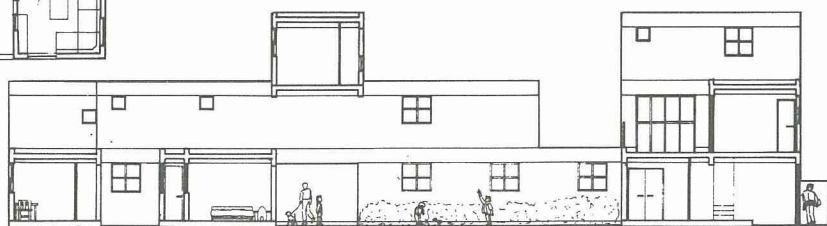
section



site plan & 1st floor

■プライバシーに対する要求から、通常の集合住宅の建物は、互いに閉鎖的な住居の集合となりがちである。それらは周囲の街の空間との連続性を欠いており、孤立して自己完結的な、自閉症的ともいえる構成となっている。■この計画では、内部と外部の空間の連続性、個人的な領域と公共の領域とのつながり、さらには開発行為と周辺の地域性とのスムーズな関係といった要素に対して配慮した住宅地開発の手法

を提案することを試みた。■具体的には、さまざまな形式の住棟をつなぐ形で、通り抜けの街路空間を設けることで、個々の住居相互を滑らかに結びつけるとともに、周囲の街の環境に対して開かれた連続性のある空間をつくりだすことを可能としている。■さらに、住居へのアクセスを内部空間と外部空間との中間的な性格をもった場とすることで、この街路空間とプライベートな住宅内部との連続性を高めている。



section

project 2

既成市街地における  
複合建築

Urban Complex



●第2課題：茶谷正洋教授，藤本昌也講師，小倉善明講師  
●期間：11/26～2/1  
●課題主旨：東京中心部の敷地に，オフィスと住居を主とし，店舗を併設した複合建築を設計する。将来周辺の建物がつくり替えられていくとき，そのプロトタイプとなる提案が求められる。

●想定敷地：港区芝3丁目 面積4100㎡  
●施設内容：業務施設 敷地面積の430%程度(商業施設を含む)，居住施設 敷地面積の230%程度(100㎡，50㎡程度の住宅を組み合わせる。駐車台数160台。  
●主な法規制：商業地域(北側前面道路より20mまで)，他の部分は近隣商業地域，防火地域，総合設計制度を利用し，容積率670%。

講評

教授 茶谷正洋

都心の空洞化対策として今日的な公開空地を設け，容積率の割増を得られる集合住宅併設オフィスビルという難しい課題である。エスキース・チェックは，学生の立ち上がりが遅くて辛かったが，最後は頑張ってくれた。

3年生69人中，申告51名，発表43名，病気で遅れた者2名。結果的にチェックを何度もうけた者ほど評価が高かった。

稲場政人は，オフィスで狭まれたアトリウムに2つの楕円形のコアを配し，秀逸の表現と認められた。山下毅は，オフィスを地下に配し，住居を地上に配する大胆さに説得力があった。藤井正喜は，現代的な感覚に訴えた作品であった。是永美樹は，高層の住宅部のもちだしが勇ますぎたが，地上部のオフィスやアトリウムの演出が楽しいものであった。土田剛は矛盾した内容に挑み，労作をみせた。

講評

非常勤講師 小倉善明

建築と同時に都市環境を考えてもらうのが，今回のテーマである。総合設計制度や構造，設備についてのレクチャーを交え，敷地周辺の模型をみんなで手分けをしてつくった。提案する建物をその中に置いてもらうなど，極力実践的なアプローチをとった。

全体的な印象として，問題点を的確に把握するスピードが欠けているように感じた。ある方向の可能性を探りだすために，もっと多

くのスケッチを早い段階で描く練習をしてほしい。コンセプトが適切でないのでゆきづまり，よい結果がでなかった案が多くみられた。

印象に残った案がいくつかある。藤井正喜君，稲場政人君の作品は新鮮味があり，意欲がみられた。土田剛君，是永美樹さんの作品は，オフィスと住宅の組み合わせ方がそれぞれ違うものの，この課題に対するひとつの解をだしている。山下毅君の作品は意表をつく案であるが，実現可能な問題提起をしている。

住居における住まい方など，もう少し学生諸君と話し合いたかったという思いも，多く残った。

講評

非常勤講師 藤本昌也

建築と街づくりの関係について，建築家の宮本忠長さんが面白いたとえ話をされたことがある。日の丸の旗の赤地は建主に帰属する建築空間，白地は市民が共有する街空間。両者の関係は密接不可分である。建築の要請を受けて，建築家が赤地(建築)のありようを規定したとすると，それは否応なく白地(街)のありようをも規定したことになる。したがって，建築家は赤地と白地の関係に十分配慮し，両者に対して等分の責任を負わなければならない。というのが宮本さんの主張である。

今回の課題のねらいのひとつも，この点にあったはずである。バランスのとれた両者の関係を実現する空間形式をいかに発見するか。かなり大きな複合建築という条件にもかかわらず，それなりにまとまった作品になったと

まずは評価したい。しかし，全体的にはやはり，赤地への関心が強く，白地への意識は希薄であったといわざるを得ない。ポイントは複合建築に生まれる赤地と白地の中間領域的空間を，両者を構成する鍵としていかにうまく扱うかにあったと思われるのだが，その意味で，ここに示す作品はそうした空間関係についての明快な空間形式を提起したものと評価したい。

小倉善明 Yoshiaki Ogura

1937年 東京生まれ  
東京大学工学部建築学科，ハーバード大学大学院建築学科卒業

1962年日建設計工務(現・日建設計)入社  
現在，常務取締役 設計担当

主な作品：三井物産本社ビル(1976年 BCS賞受賞)，新宿NSビル(1982年 日本建築学会賞)，三井海上火災本社ビル(1984年 BCS賞受賞)，大宮ソニックシティ(1988年 BCS賞受賞)，聖路加国際病院(1992年)他

主な著書：『オフィスルネサンス』共著，彰国社

藤本昌也 Masaya Fujimoto

1937年 旧満州新京生まれ  
1962年 早稲田大学建築学科大学院修士課程修了，大高建築設計事務所

1972年 現代計画研究所設立  
現在，現代計画研究所代表取締役，法政大学工学部建築学科講師，建設省建設大学校講師，木造建築フォーラム理事他

受賞：日本建築学会賞・業績部門(1978年)，BCS賞(1980年)他

主な作品：茨城県六番池団地，ヨックモック本社ビル，石川県営諸江団地，亀戸・大島・小松川地区E-41街区，ベルコリーヌ南大沢10・11ブロック

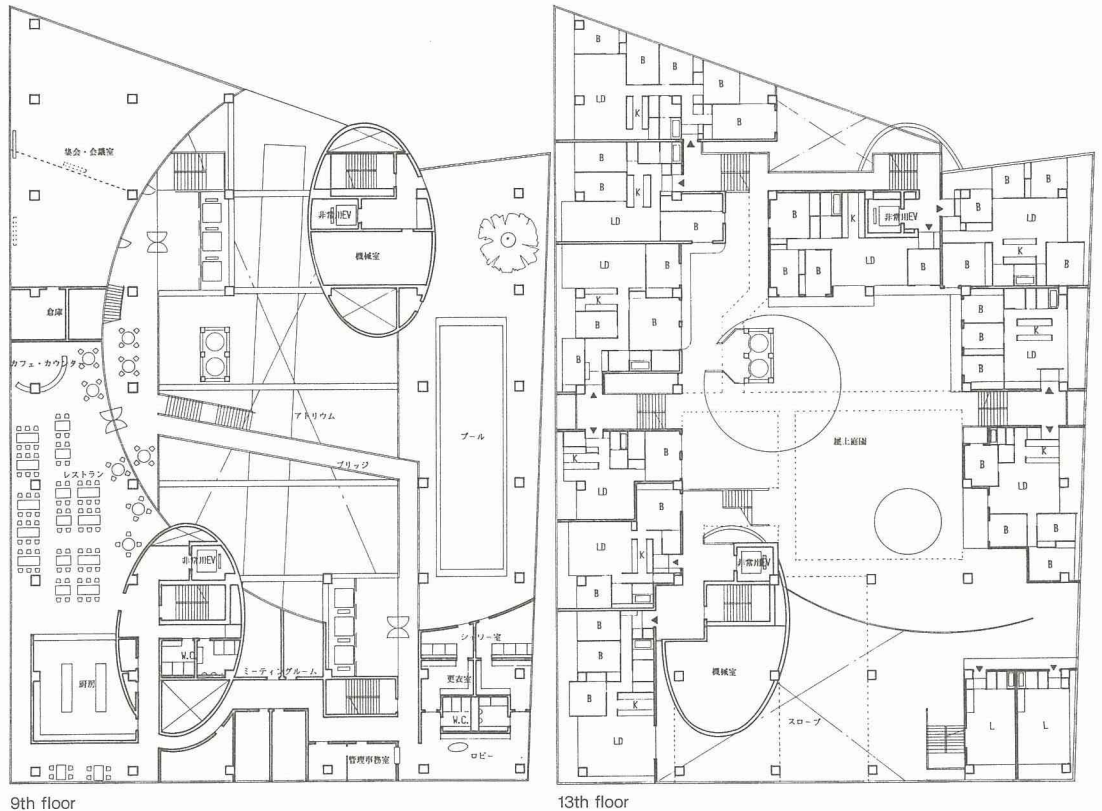
主な著書：『まちの再開発』共著，有斐閣

# 既成市街地における複合建築

Urban Complex

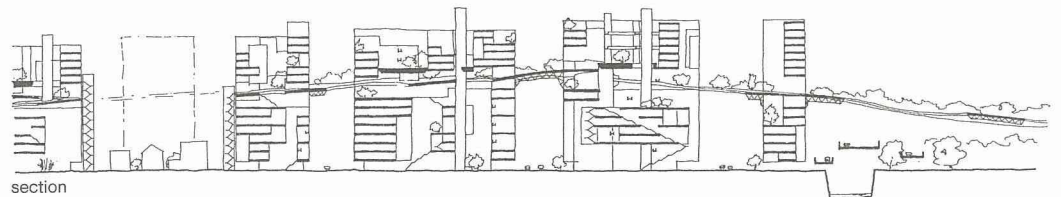
稲場政人  
Masato Inaba

■設計は常に矛盾と戦う作業である。開発と保存、巨大資本と地域社会、経済性と豊かな空間、高度利用と日照問題、意匠性とメンテナンス、高品位とコスト…。■一見自由度を与えられたように見える今回の課題であるが、こうした矛盾を真正面に取り組めば自由度はほとんどなくなるのである。なにを捨てなにを取るか、捨てることの論理性はなんなのか、そんなことを考えながら設計を進めた。■同時進行であった設計演習のコンプレックスにおいてはシンプルで明快なコンセプトを求めたのに対し、この作品は複雑で明快さに欠ける。過大な(と思えた)容積の処理に時間を使ってしまったこともあるが、こうした大規模コンプレックスのもつ必然ではなかったかと思う。■東工大生は互いに批評しあうことを悪だと考えている。必然的に点数絶対主義になるが、その中において、この作品は自衛の機能も果たしているのである。

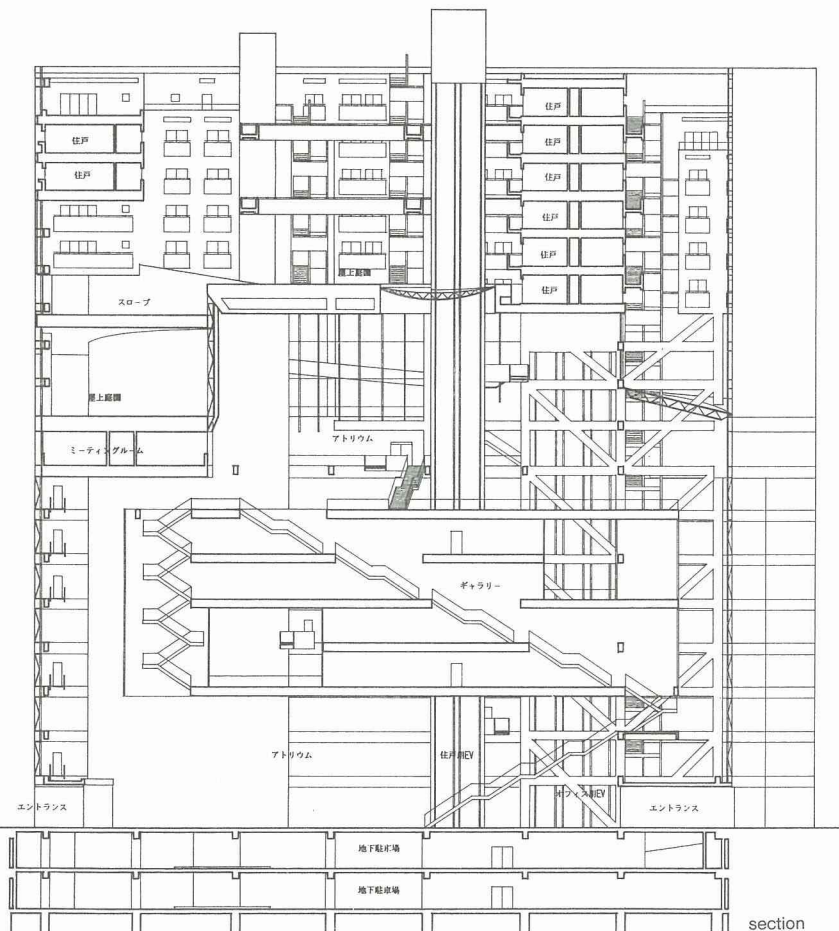


9th floor

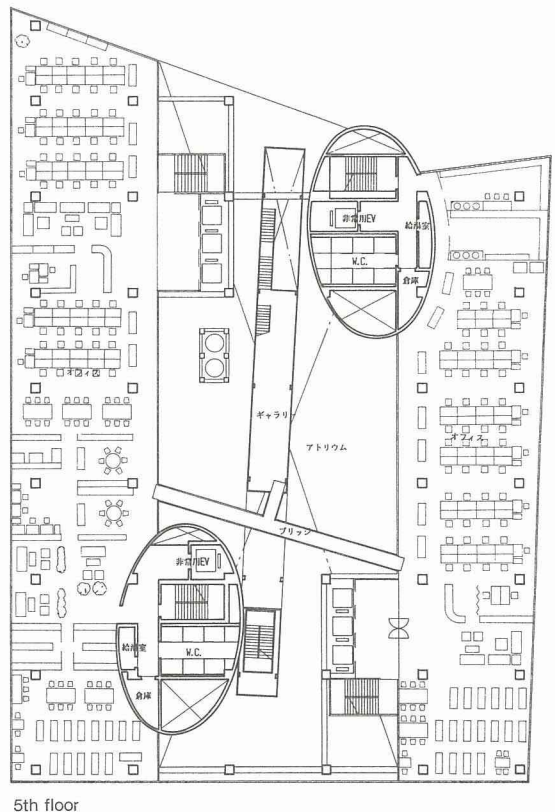
13th floor



section



section



5th floor

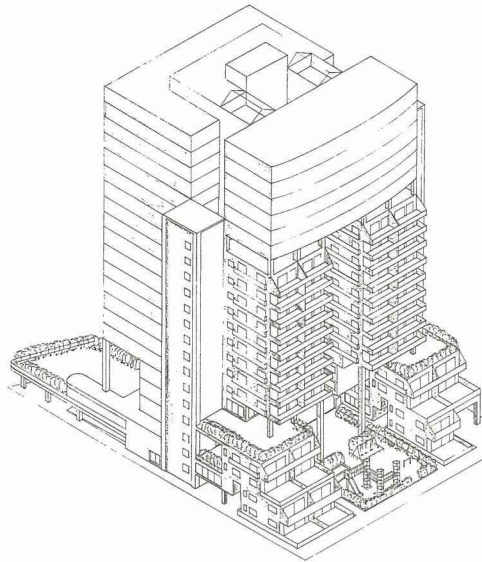
# 既成市街地における複合建築

Urban Complex

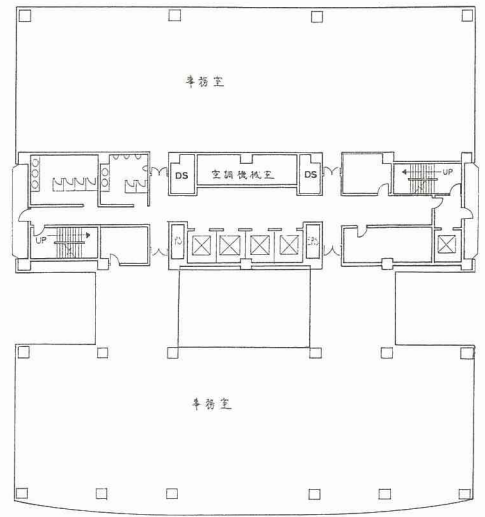
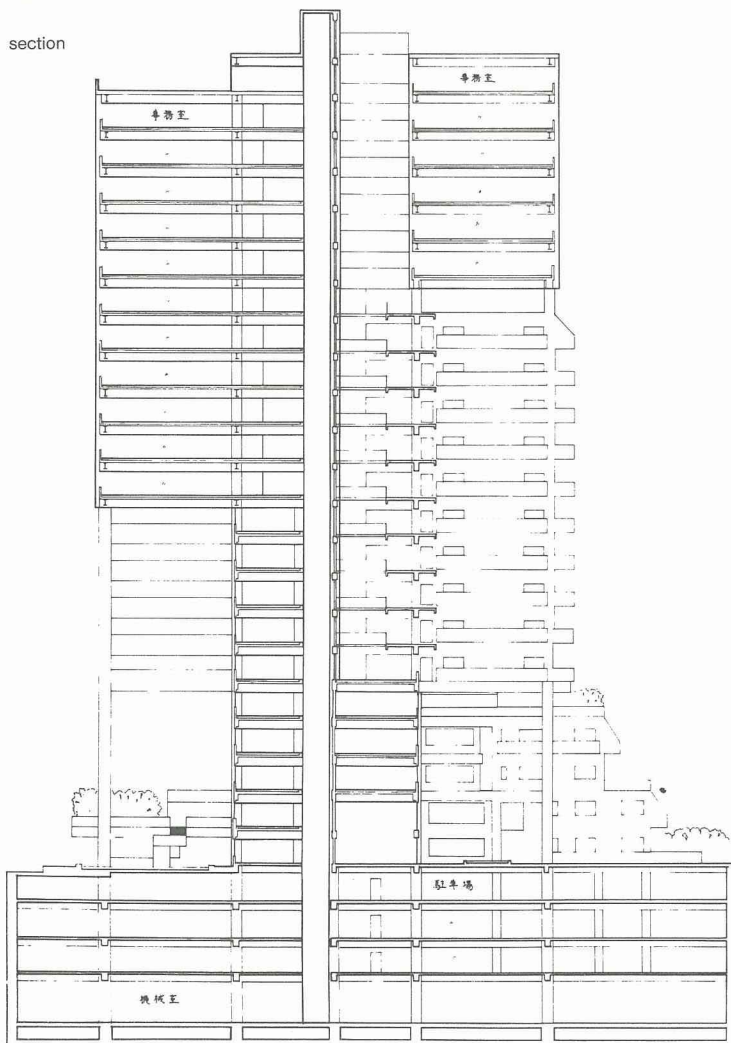
土田 剛

Takeshi Tsuchida

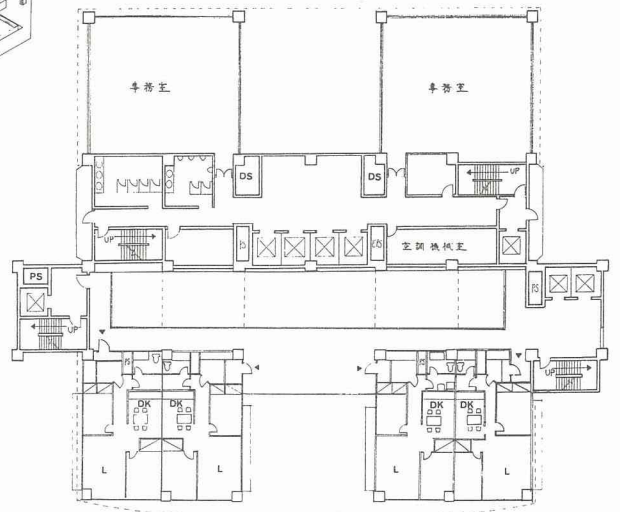
■今回の設計計画は総合設計制度に基づいているため、公開空地のあり方、都市における居住環境、それと関連して住宅とオフィスの関係を課題として取り組んだ。■主としてオフィスは北側、住宅は南側に配置し、北側の公開空地はオフィス・店舗を出入りする人びとが利用するパブリックな空間。南側は住宅を中心とする幼児・児童のための公園とした。■オフィス・住宅・店舗を、複合施設として自分なりに最適化し、ひとつの建物とするにあたって重視したことは、オフィスからの景観（芝公園）、店舗からの景観（南北の公開空地）と外部からの店舗へのアプローチ、住宅における採光と通風、プライバシーの確保である。■さらにオフィスや店舗用搬入の動線と住民の動線とが交差しないようにした結果、オフィスと住宅は関係が断たれ、構造的にも分離しかけた現在の姿となった。



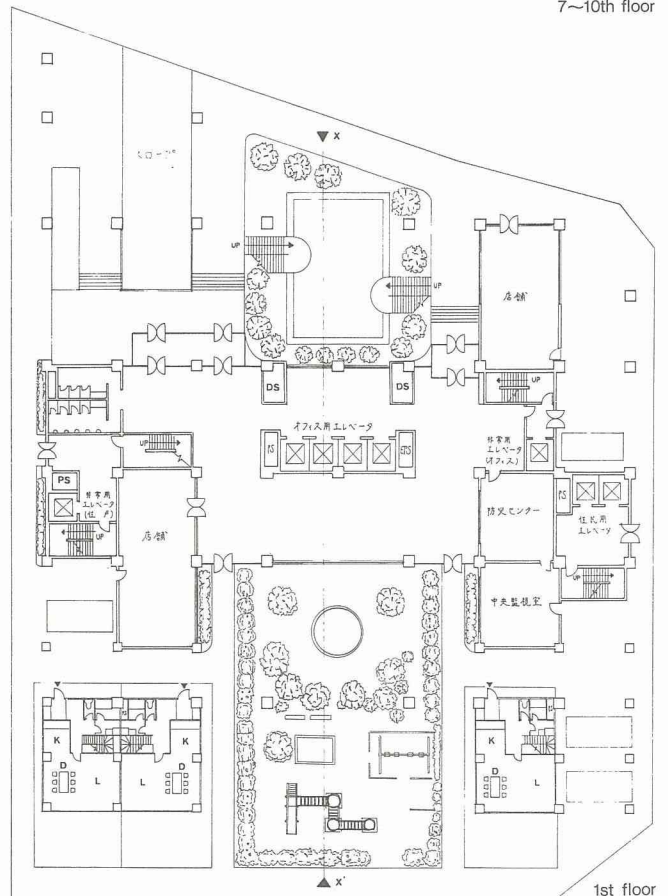
section



17~21th floor



7~10th floor



1st floor

# 既成市街地における複合建築

Urban Complex

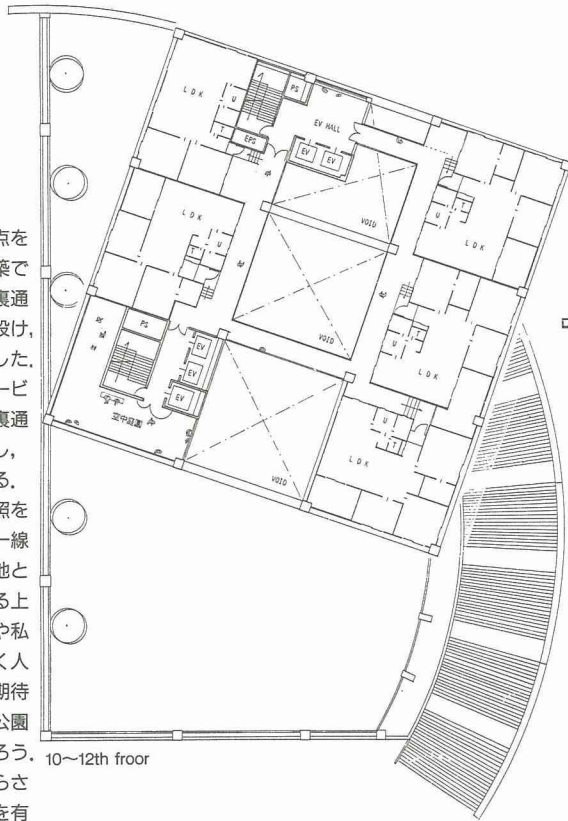
藤井正喜

Masaki Fujii

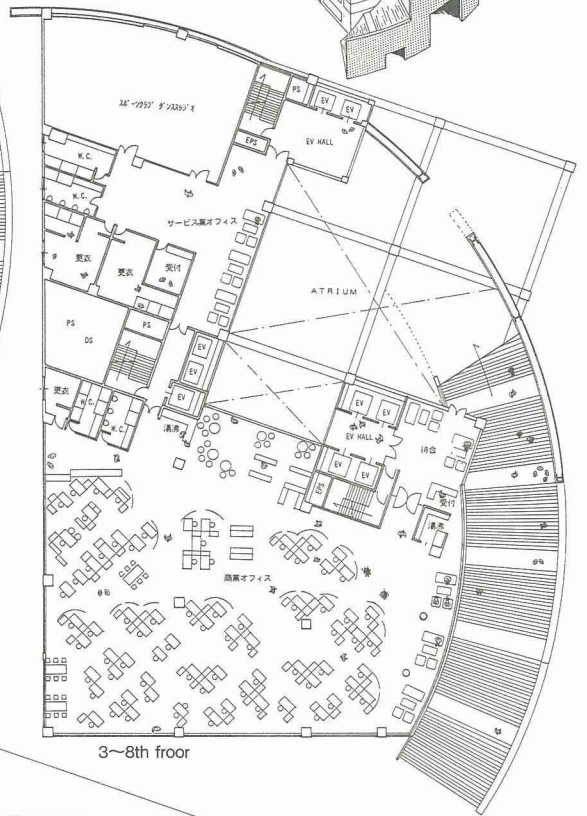
■本計画は住宅総合設計制度の利点を生かした住宅とオフィスの複合建築である。人通りの多い前面道路から裏通りや隣地にぬけるプロムナードを設け、過密都市の活性化のための装置とした。

■オフィスは事務系オフィスとサービス業オフィスとに大別し、前者を裏通り側に、後者を公的な表通りに配し、アトリウムからのアプローチをとる。住居はオフィスの上に位置し、日照を確保すると同時に都市の雑踏から一線を画すように意図した。これを大地と結び付けるための大階段は、単なる上下移動のための装置ではなく、やや私的な公開空地としてオフィスで働く人びとの憩う場となっていくことが期待できる。これを昇った先にある芝公園の光景はこれまでとは異なるであろう。

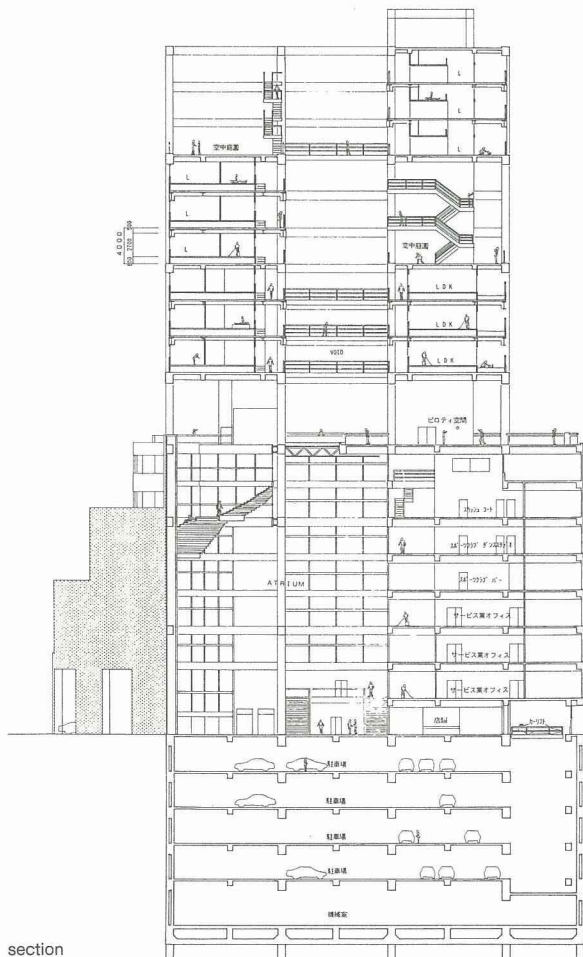
■都市に住む人びとは、これらからさまざまなサービスを受けて生活を有意義なものとしていくであろう。



10~12th floor



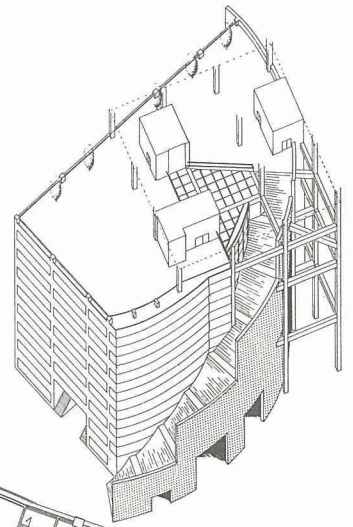
3~8th floor



section



1st floor



# 1992年度卒業設計製図・修士論文(制作) 優秀作品より

This year's diploma design and master's thesis/design thesis

卒業設計は伝統的に学部4年生が卒業時に提出する制作で、今年度からは卒業論文の代わりに制作を行う方式が中止となったため、これが学部4年生の唯一で最後の設計となる。

テーマの設定は自由で、最近の学生の選択の傾向は「華」NO.4で報告済みである。56名の提出に対し、審査の結果4名が再提出となり、修正の結果全員合格となった。建築設計教育という立場から考えると東工大は設計製図は3年次で終り、4年次では一切授業がないことや、卒業論文は指導教官の指導のもと厳しく教育がなされるのに対し、卒業設計は教官による指導を一切行わないことなど、あまりにもバランスを欠いた状態となっていることは問題であろう。卒業論文のための所属研究室という枠にとらわれることなく、卒業設計の指導は専門教官により行われるべきだと思われるし、結果的におこっている卒業設計の内容の低下はまことに嘆かわしいと考える。特に将来、設計方面を志している学生に対しては、このようにだれもが取り組む審査基準の甘い卒業設計とは別に、もう少し高い水準が要求される従来の卒業制作は、ぜひ復活させるべきであろう。

また、修士論文の代わりに制作を認めている修士論文(制作)については、以前は最少図面枚数のみが決められている状態であった。もう少し内容的な基準を決めるべしとのことから、社会通念上の「基本計画」か、あるいは「基本設計」に少し欠ける程度の提出物を義務づけることを提案したが、学科内でうやむやになってしまった。外国の修士のディプロマで実施設計に近いものを見たことがあるが、少なくとも計画説明書や技術的な裏付けの説明図などあるべきであろう。このようなプラクティカルな内容は、建築をつくる場合に必ず求められるものであり、卒業というけじめの際には、チェックポイントとして重要と思われる。しかし実現化を前提とせず、思想や美学を中心課題として表現したものがあってもよいが、それには高いレベルのオリジナリティーを求めべきであろう。こういったリスクを提案をする学生がほんとうはたくさんいてほしいところである。

(教授 山下和正)

## お台場埋め立て地開発計画

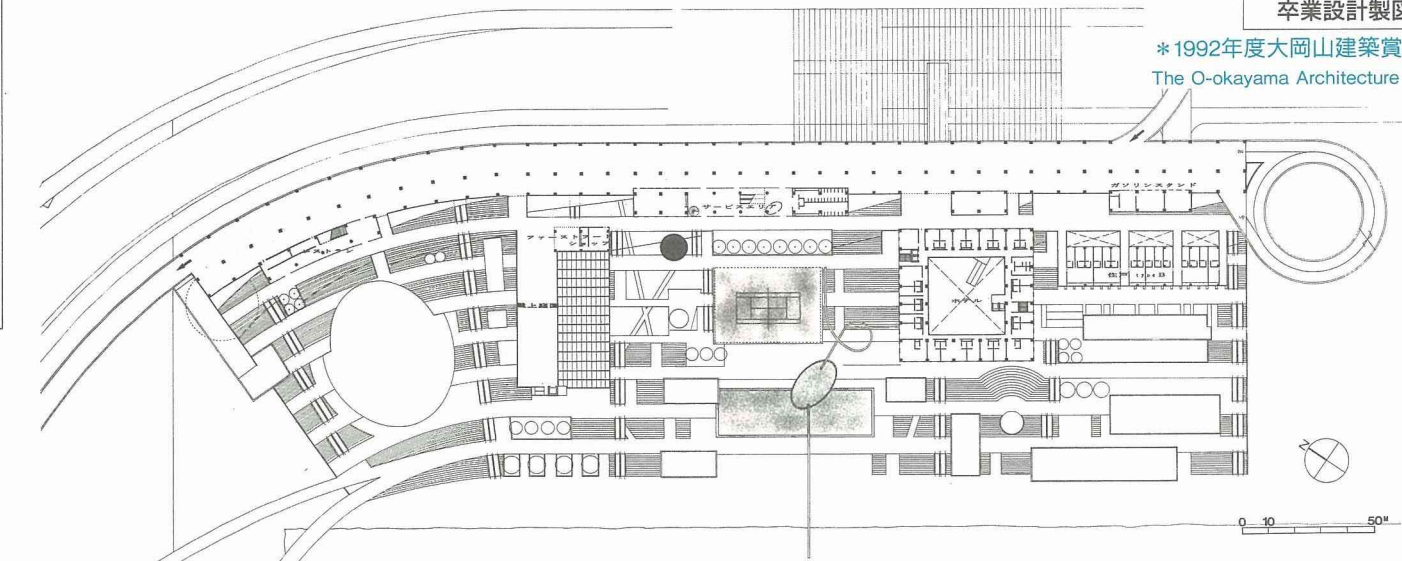
Tokyo Teleport Complex

足立 真 (坂本研究室)  
Makoto Adachi

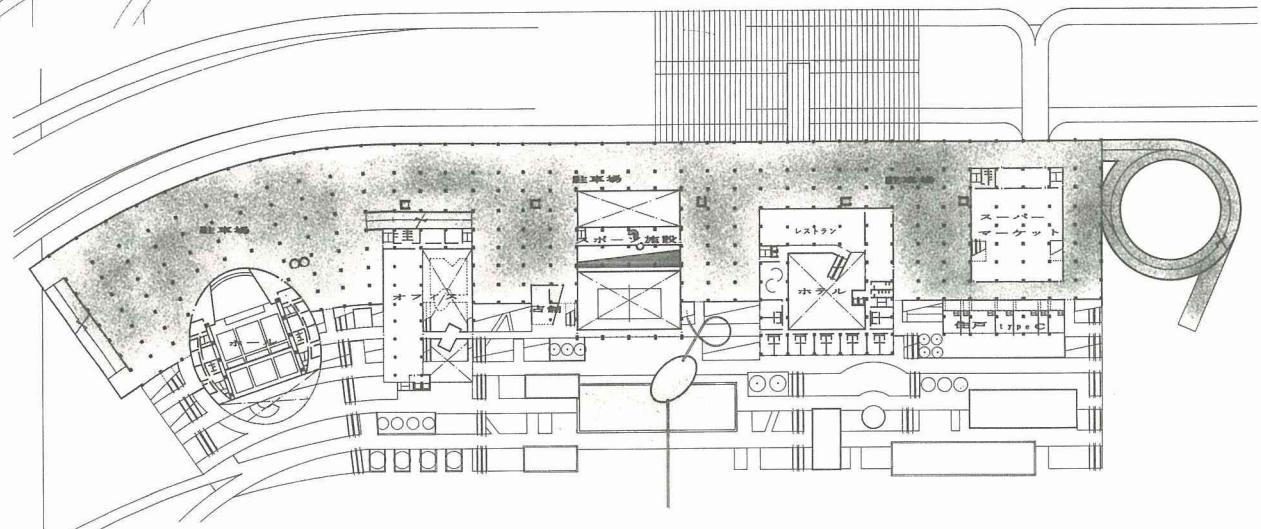


■首都圏再開発により「東京テレポータルタウン」として東京圏の中心となる東京湾の埋立地。その中のお台場海浜公園に面する親水性の高い敷地をさまざまな目的をもつ人びとが共有するような複合施設を計画する。■高速湾岸線などの道路網によって支えられる新都心の施設では莫大な規模の駐車場が用意される必要がある。それは各機能で共有することができる。そこでこの複合施設は駐車場のポリウムに、各機能のポリウムが組み込まれるとい

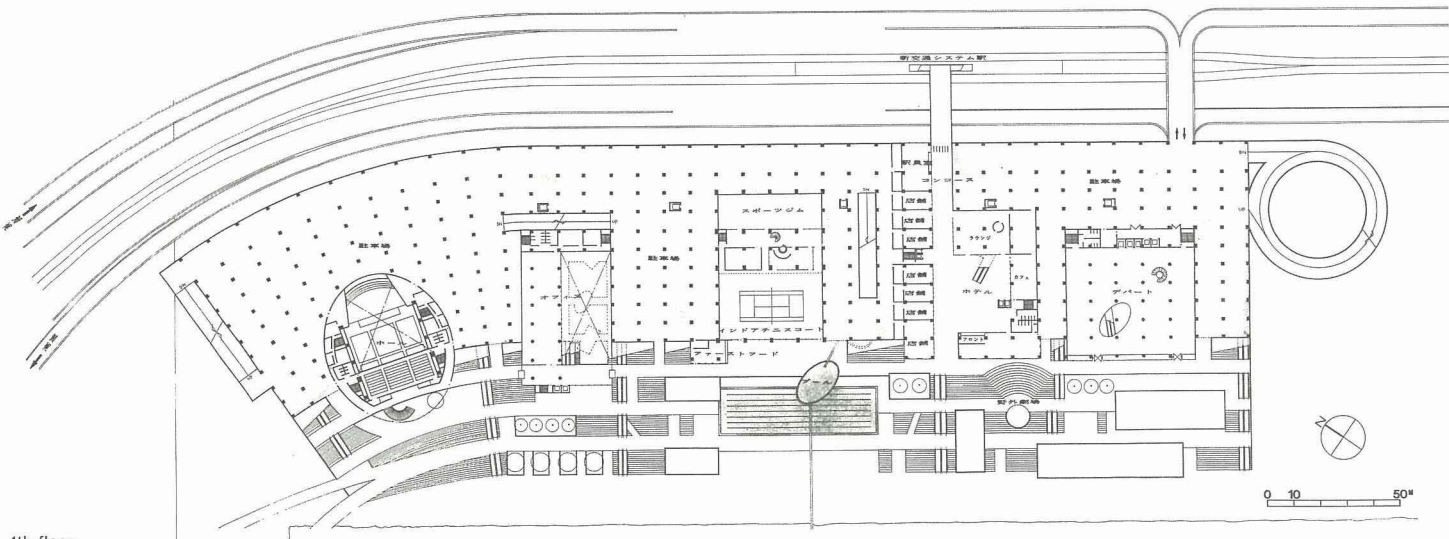
う構成をとる。駐車場は海浜公園の砂浜に連続した斜面をつくりだし、車は斜面の裏側に対して立体的にアプローチする。各機能への入口は斜面上に設けられ、逆にサービス動線はすべて斜面の裏で成立する。■このように斜面(巨大な階段面)の表裏を分節面とし、海浜公園に対しては各機能の差異による変化のある立面を、裏の高速道路には「東京テレポータルタウン」の入口として高速で通過する者へのサインとなるような立面を与える。



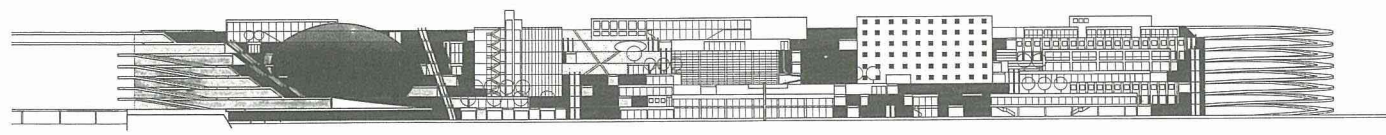
8th floor



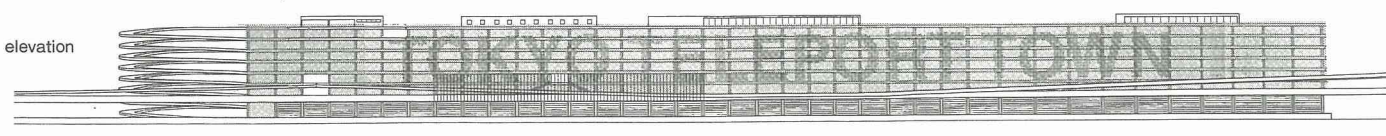
5th floor



4th floor



south elevation



north elevation

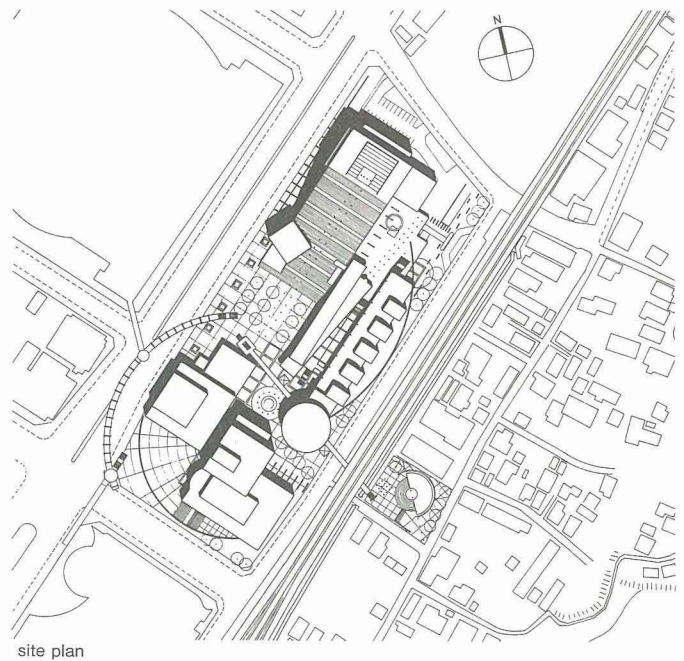
# 横浜芸術プラザ計画

Yokohama Art Plaza Project—Complex for Art Scenes—

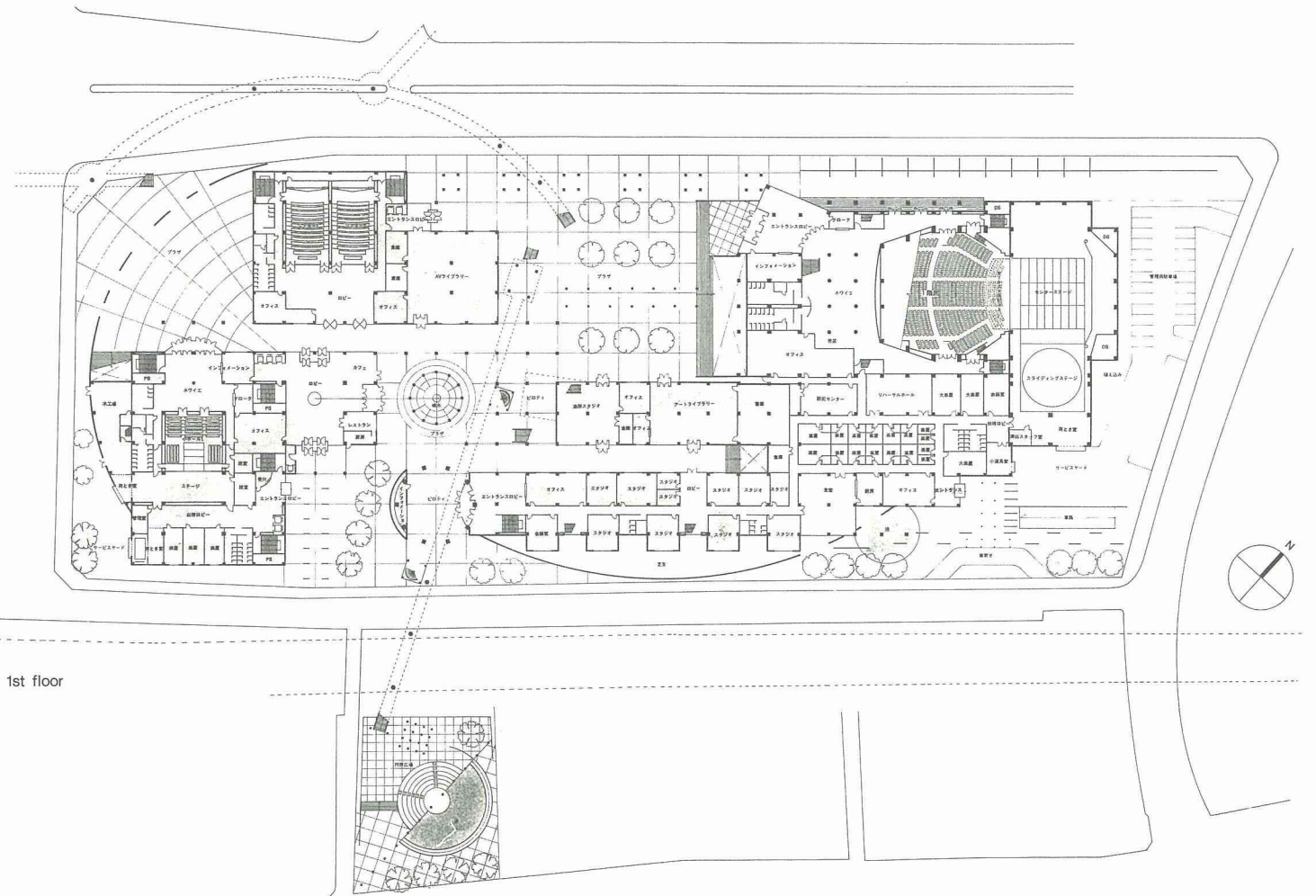
鈴木智朗 (志水研究室)  
Tomoaki Suzuki

■広場はさまざまな形態の中心をもち、劇場は舞台を中心とした小宇宙を形成する。いっぽう外部空間で他方は内部空間であるがどちらも中心性をもつ空間である。■計画地の新横浜は横浜市第二の都心として近年急速に発展してきた地区であり、ここに「横浜芸術プラザ」を計画することにより「横浜アリーナ」とともに横浜市の芸能・芸術の中心地区となり、さらに活気あふれる街になる。■「横浜アリーナ」がワンボリュームの完全な内部空間である

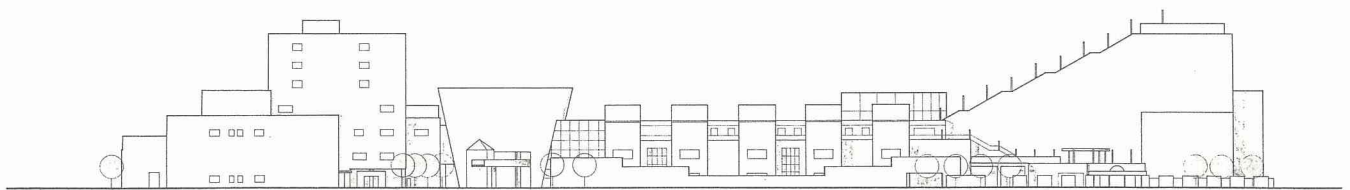
のに対し、「横浜芸術プラザ」は外部空間を積極的に取り入れ、全体でひとつの広場かつ劇場として成り立つ。■外部空間（プラザ）と内部空間（ボリューム）が混合し、演劇を主として映像・美術などの文化的活動や人びとのコミュニケーションの場を形成する。その中を人びとは回遊し、さまざまな人と芸術に出会い、相互に刺激しあう。さらにここで新しい芸術を生みだし、飛躍させていく。ここでは誰もがアーティストである。



site plan

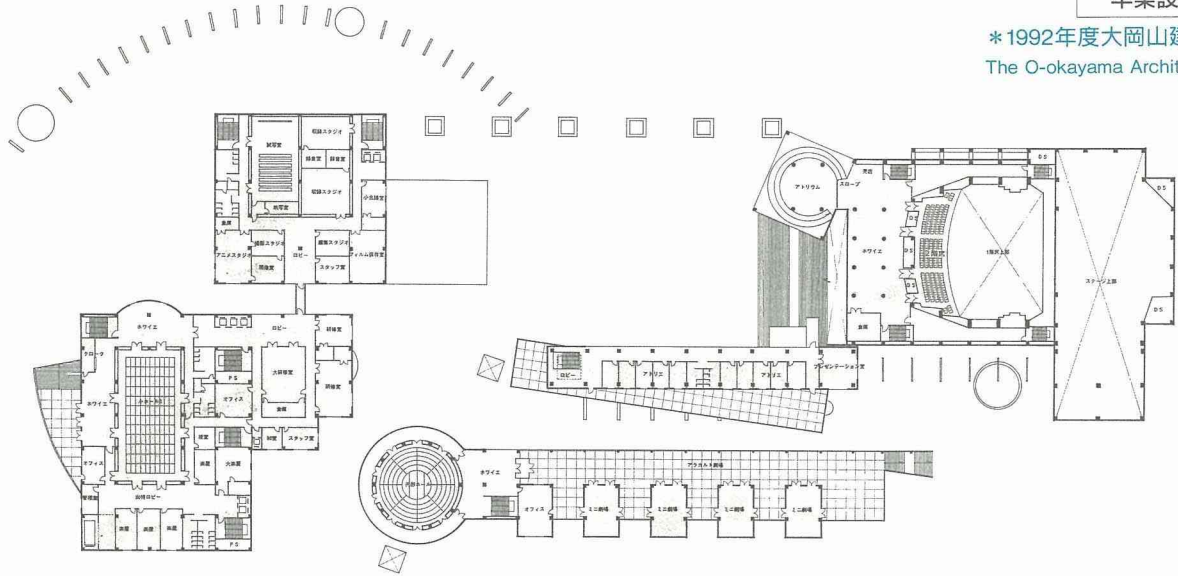


1st floor

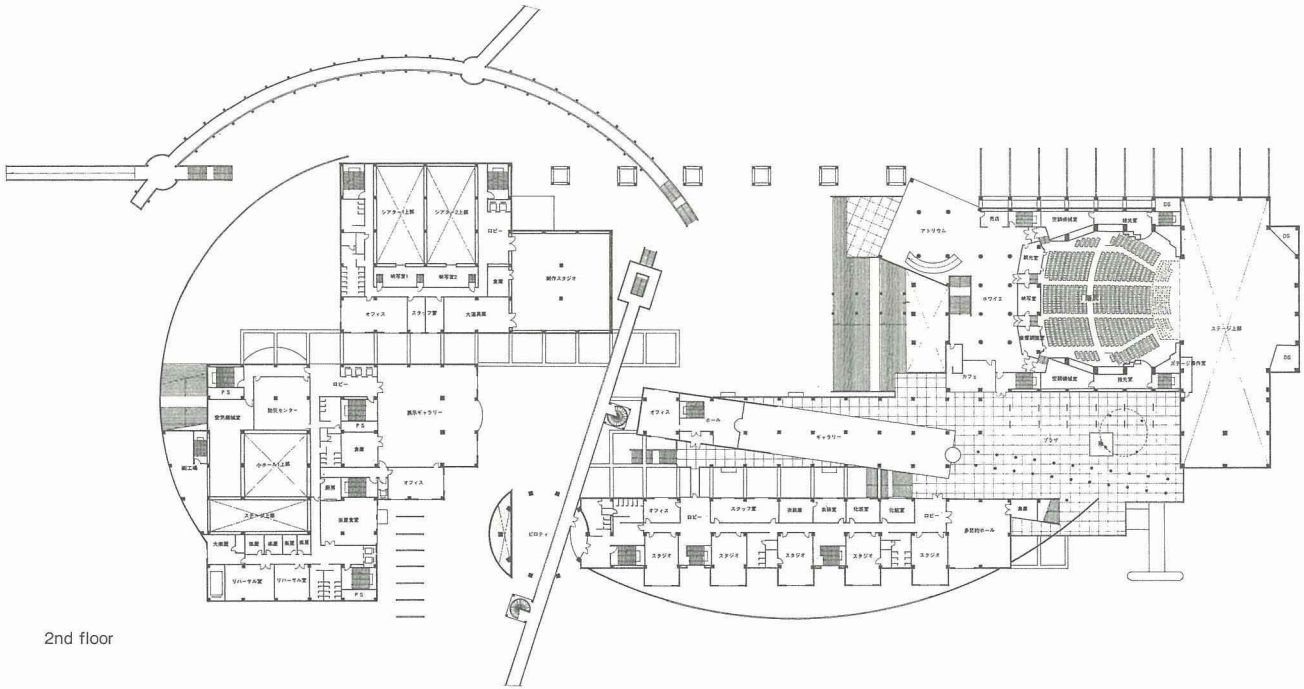


south elevation

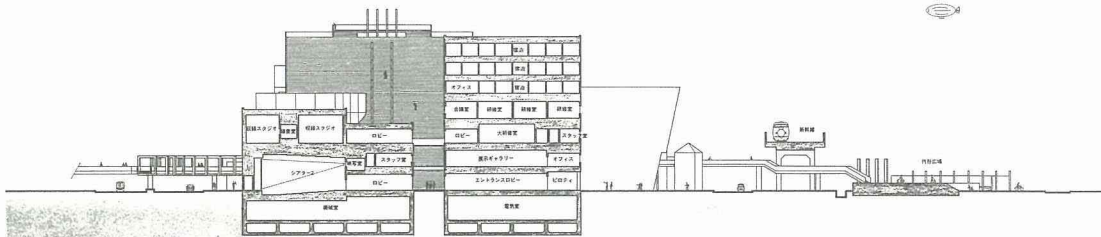
3rd floor



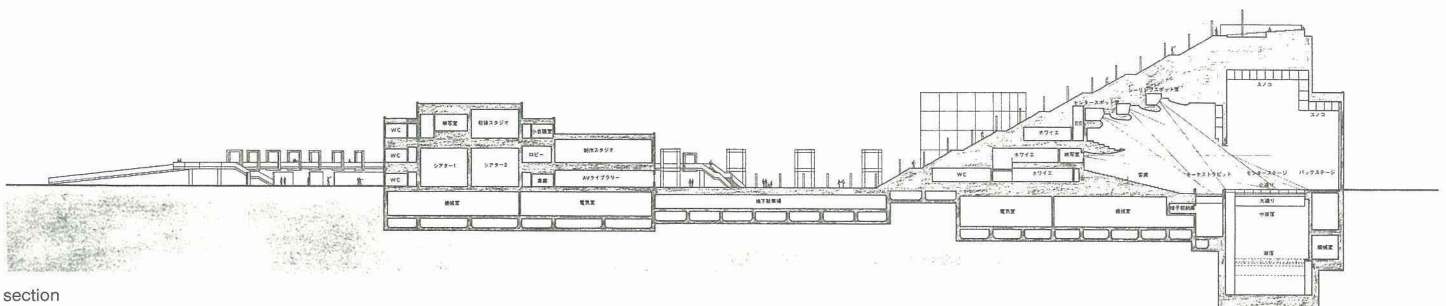
2nd floor



section



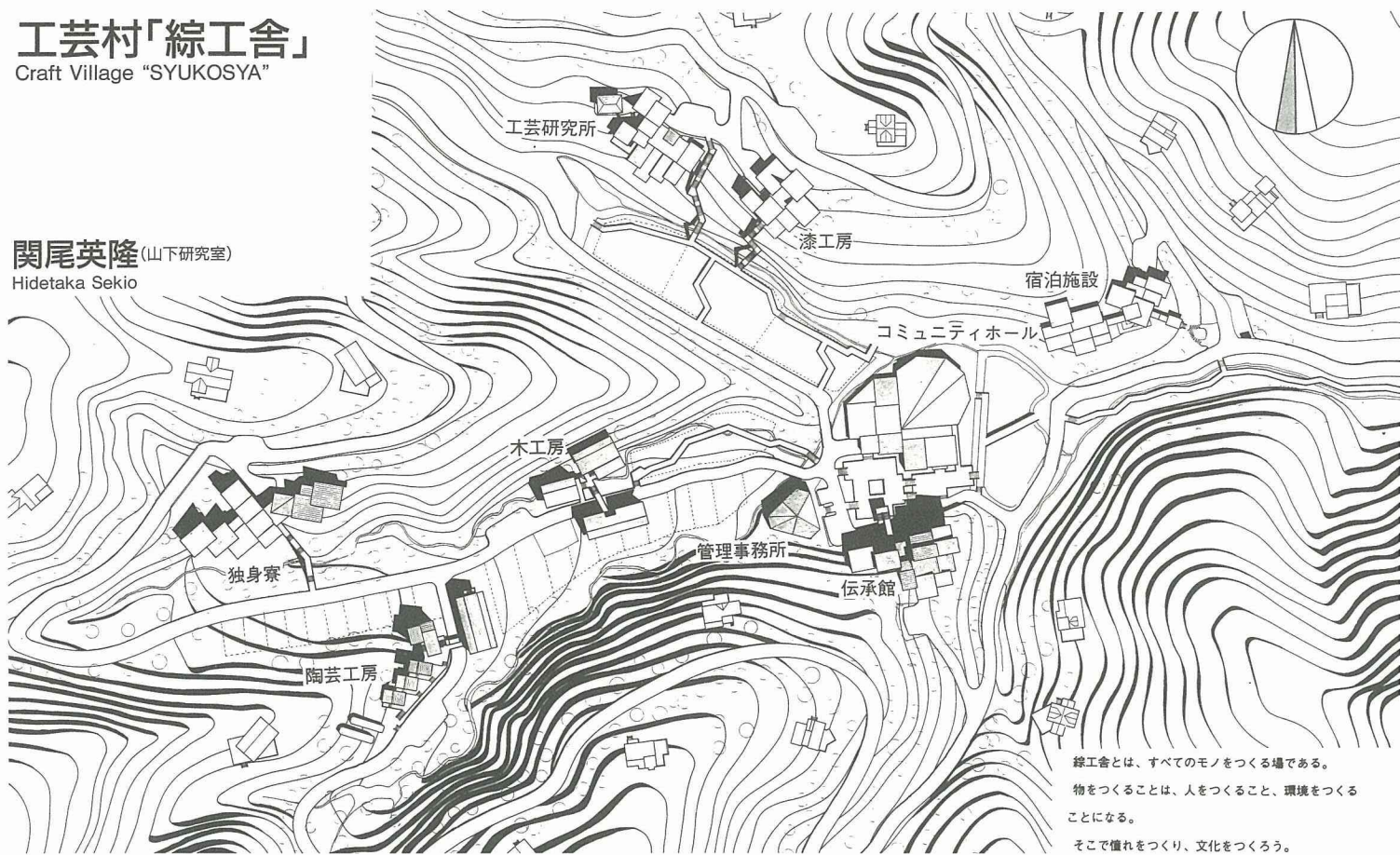
section



# 工芸村「綜工舎」

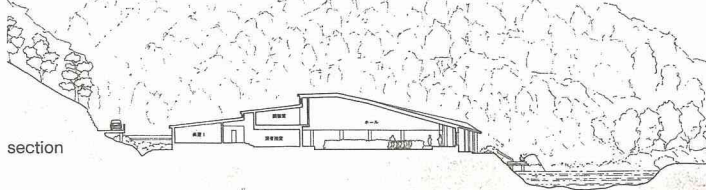
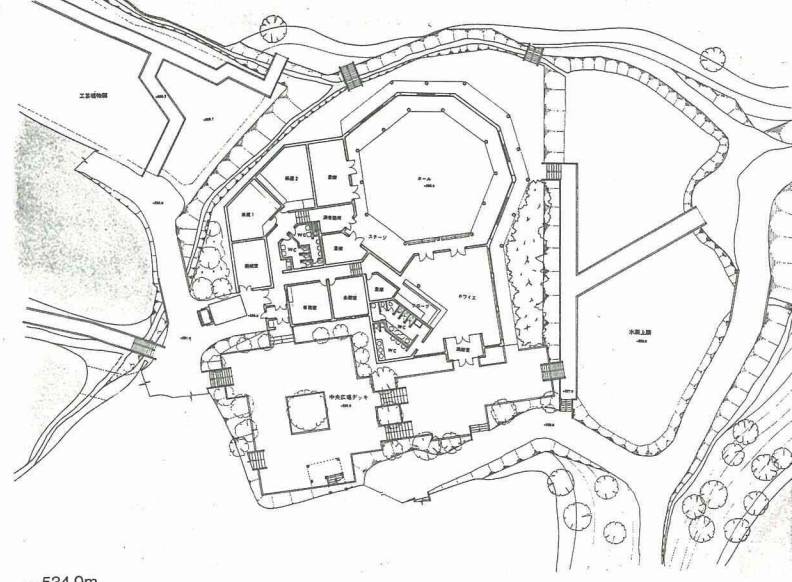
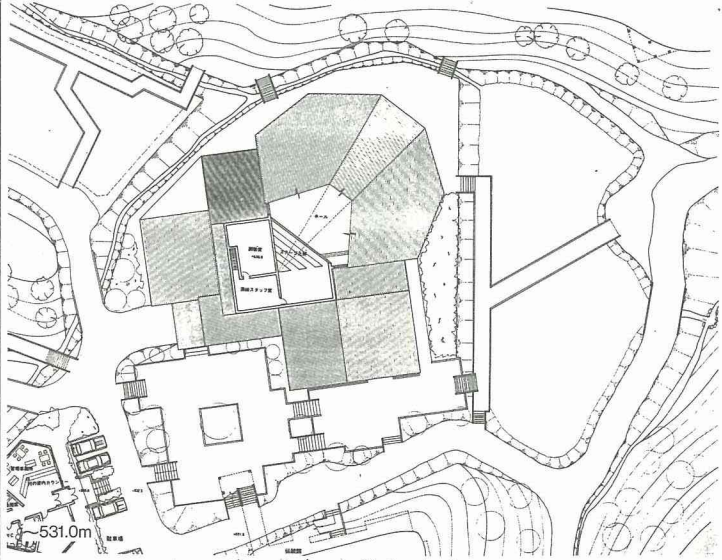
Craft Village "SYUKOSYA"

関尾英隆 (山下研究室)  
Hidetaka Sekio

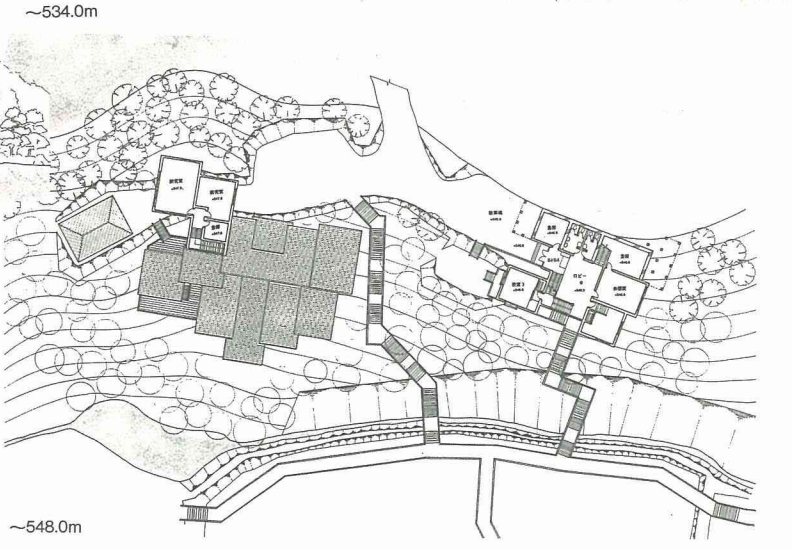
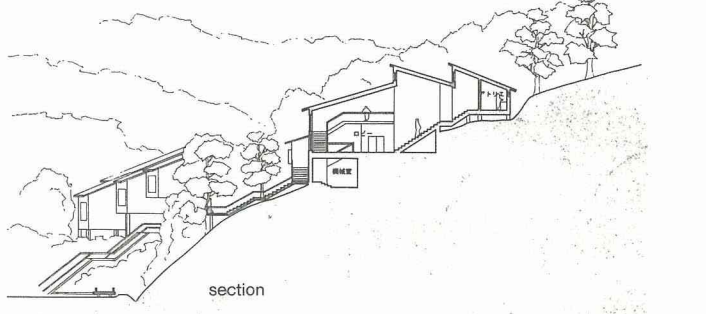


綜工舎とは、すべてのモノをつくる場である。  
物をつくることは、人をつくること、環境をつくることになる。  
そこで憧れをつくり、文化をつくろう。

中央部 (コミュニティホール・管理事務所)



漆工房・研究所

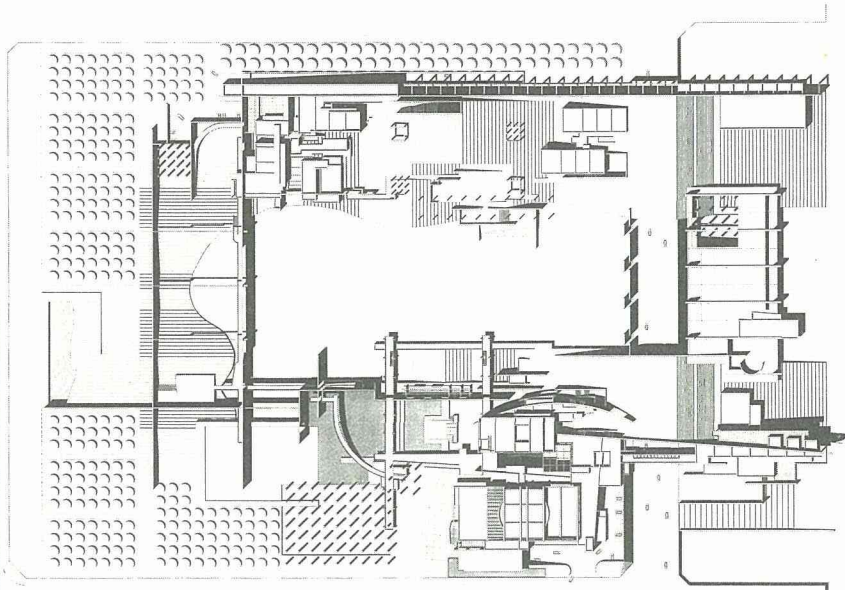
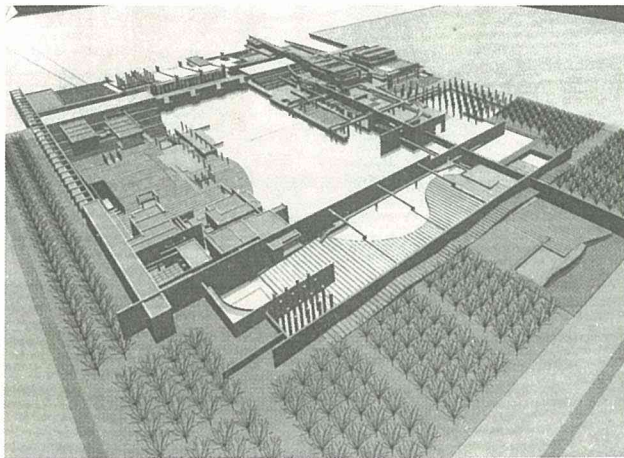




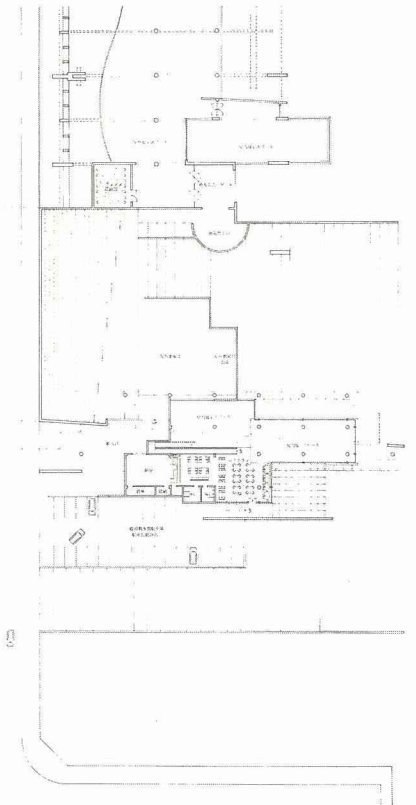
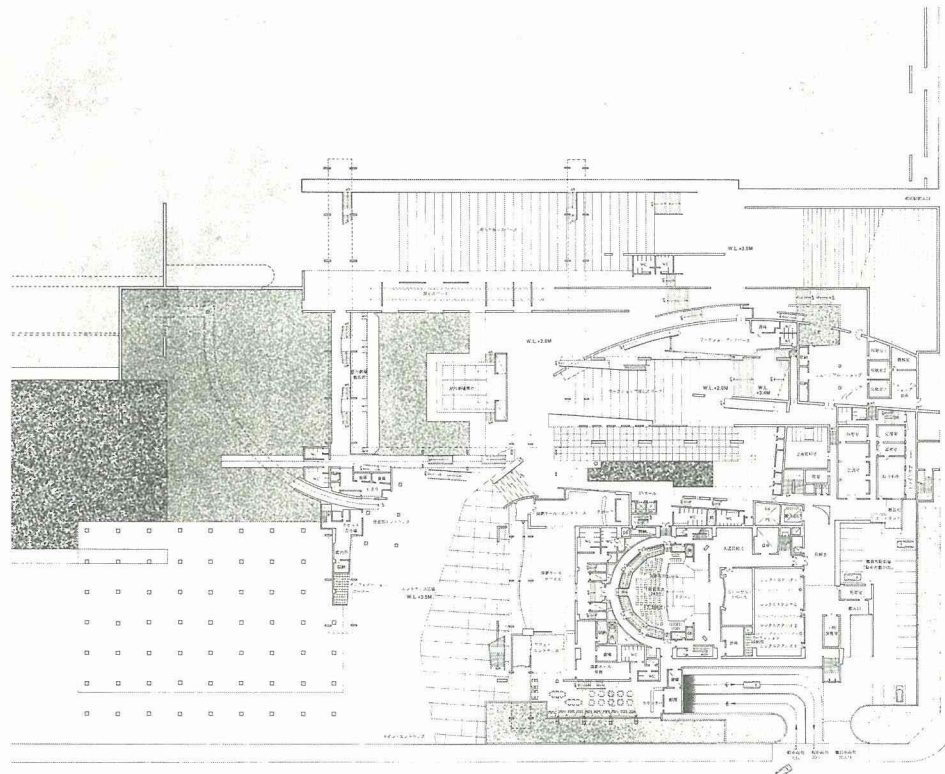
# 分散配置・廻遊形式による美術館計画

A Project of Art Museum, Type of Circulating Around the Dispersed Volume

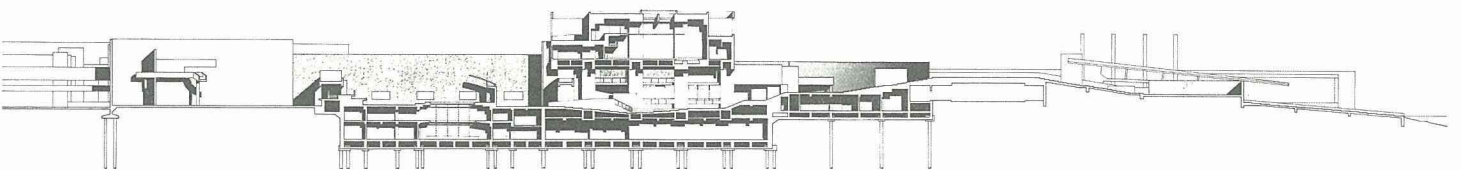
佐々木健夫 (山下研究室)  
Takeo Sasaki



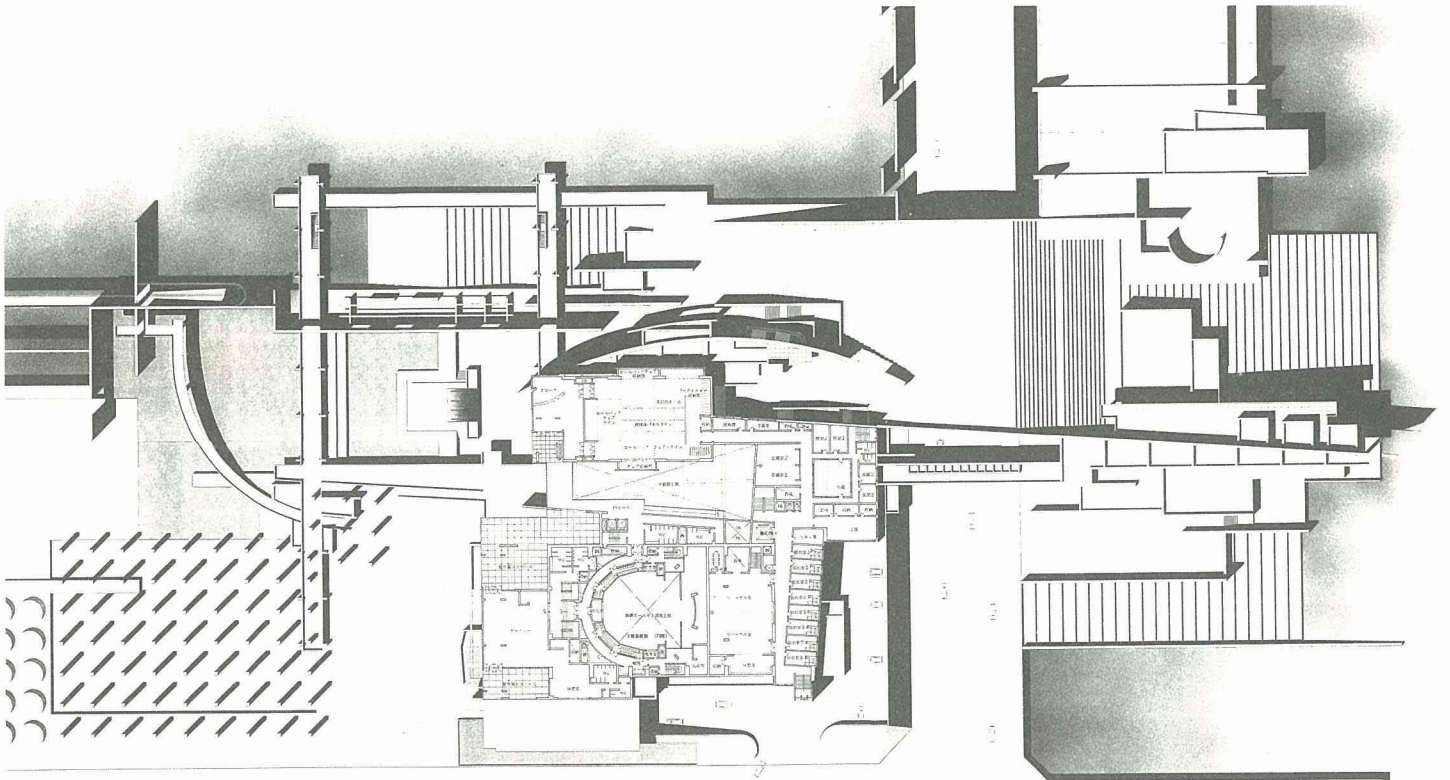
site plan



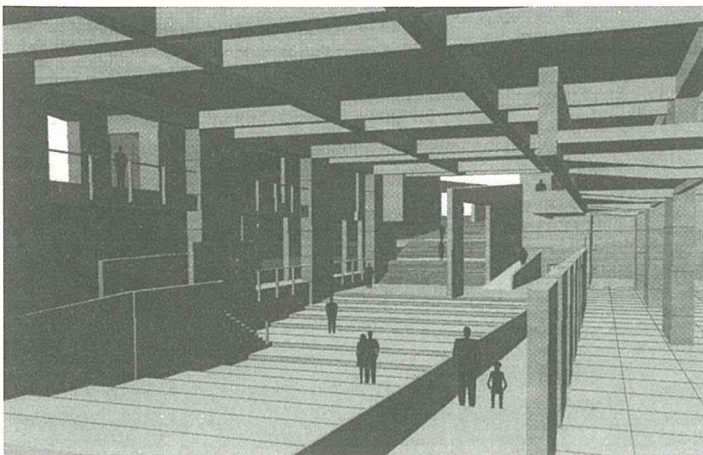
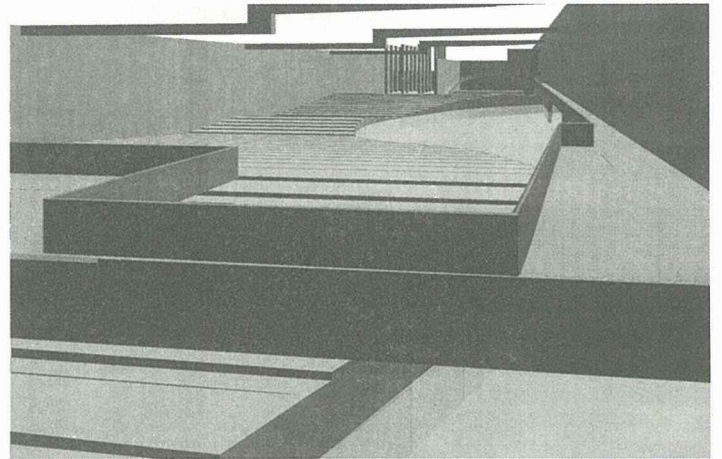
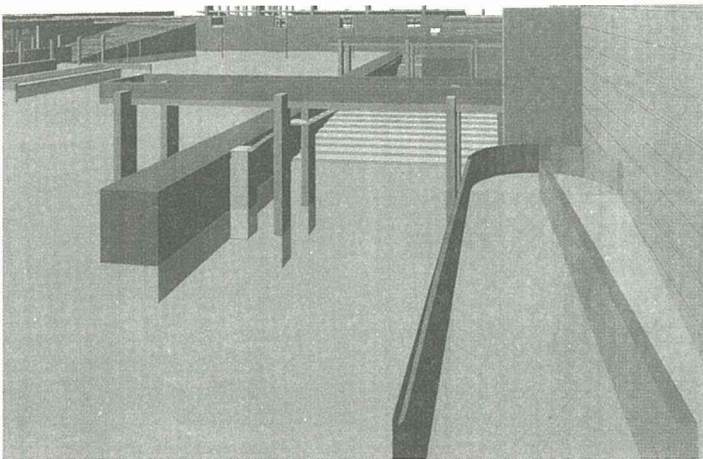
1st floor



section



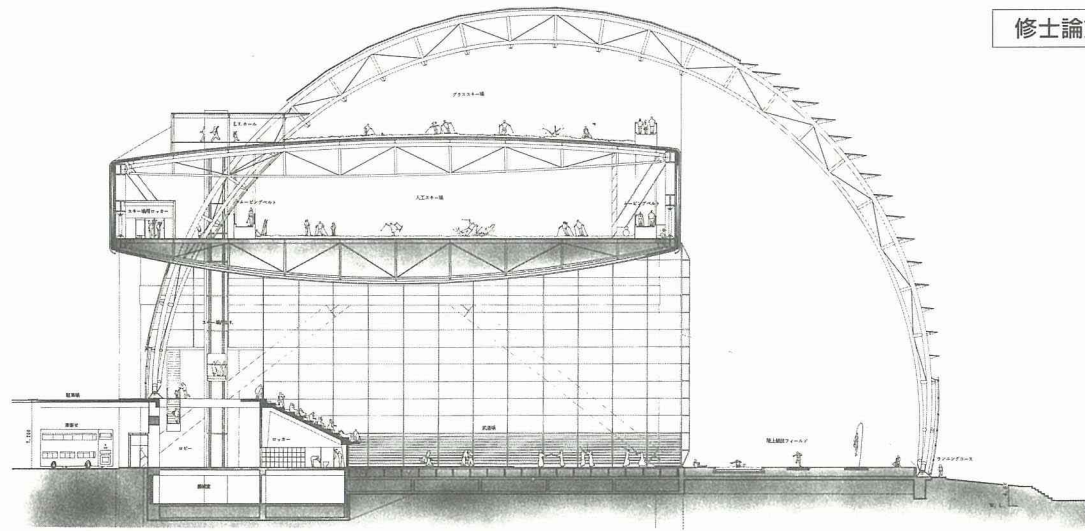
3rd floor



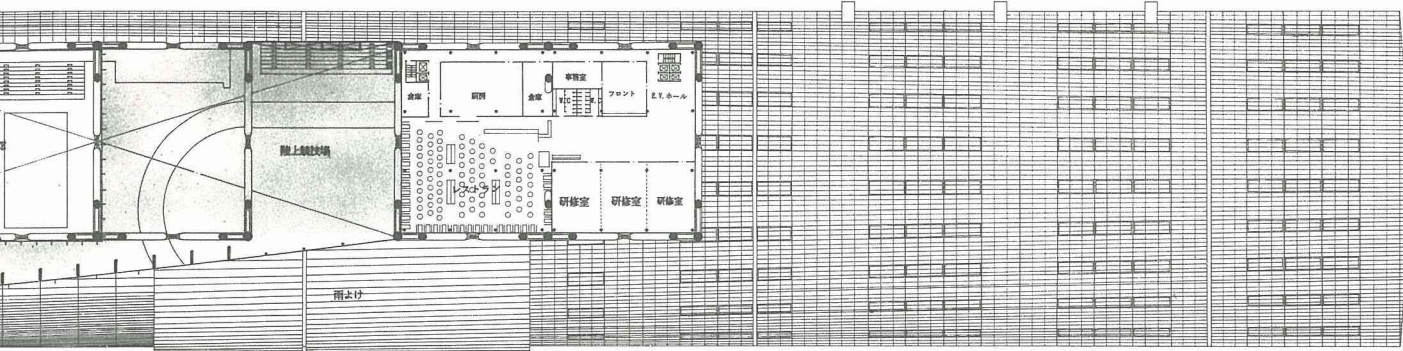
■美術館は、来館者が空間内に分散して配置されたオブジェクトの間を主体的に動く空間をもつ。設計者が演繹的につくりだした空間〈見えかた〉を、来館者が弁証法的に空間〈見えかた〉を体験していくことが顕著な建築類型である。以上のような前提に基づき、本計画では各展示室を中小規模に分割・分散配置し、これらの配列と全体構成に廻遊式庭園の構成法を導入することで、社会的な役割が変化しつつある美術館に対し、新たな芸術鑑賞環境・

環境芸術の場として機能していくことを目指したものである。■具体的な計画対象地として江東区辰巳の森公園を選定し、階段で構成されたうねりをもつ造成地形を基本的な構成要素とし、ここに各展示室が廻遊式庭園の小庭園・庭園内の構造物に見立てられて配される。ここに汐入りの視覚化などを図ることで、一種の環境装置として全体が機能し、レトリック・見立てに満ちた廻遊式庭園に見立てられた美術館となるよう全体計画を行った。

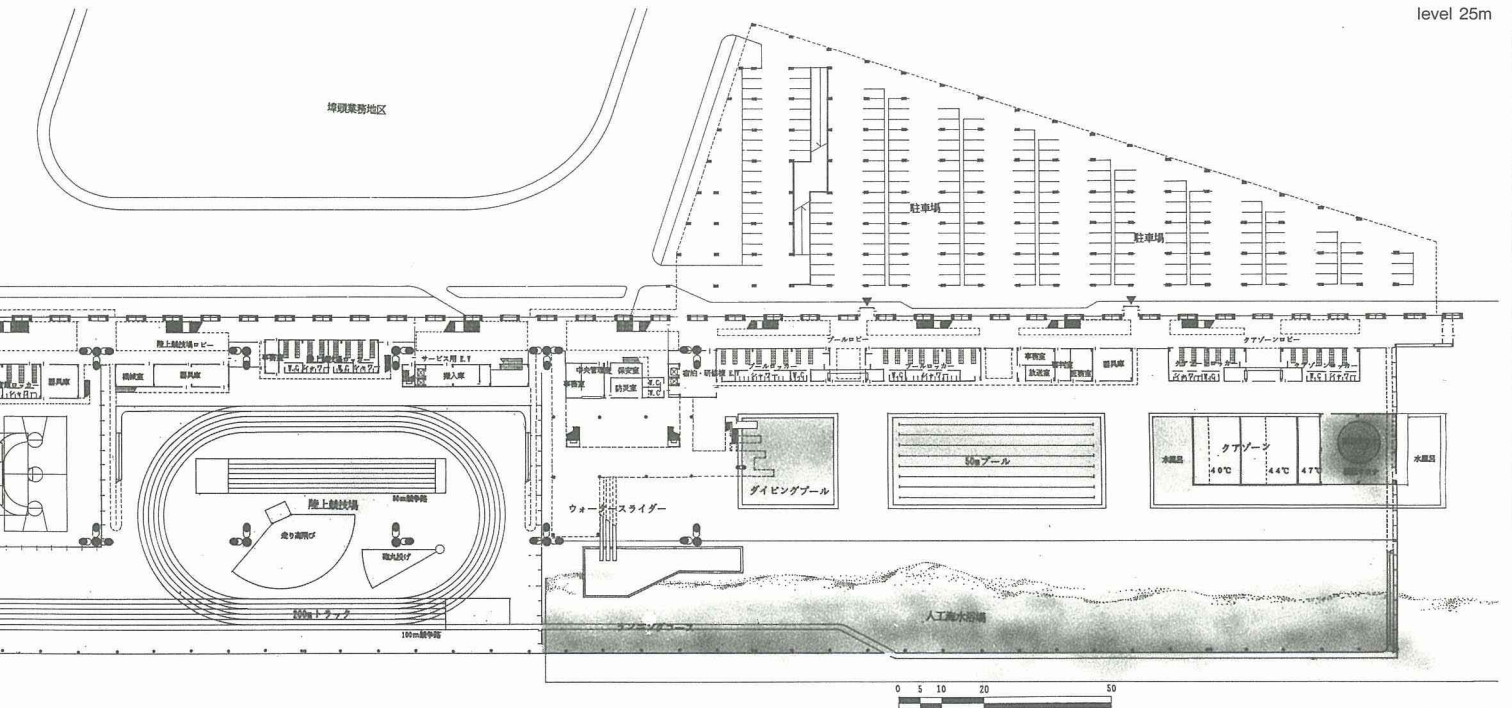




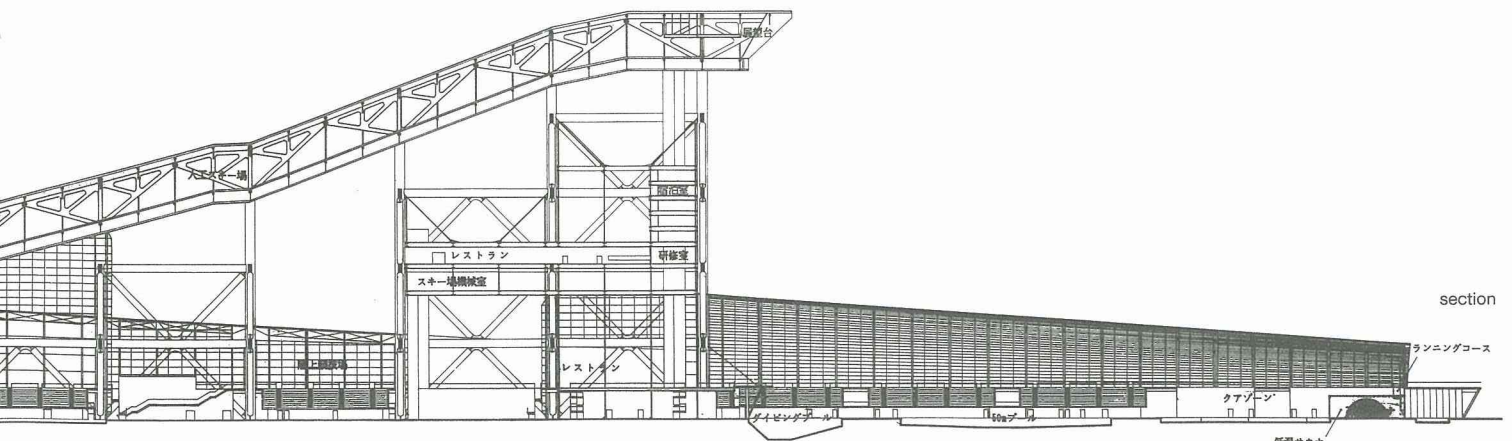
section



level 25m



level 1m

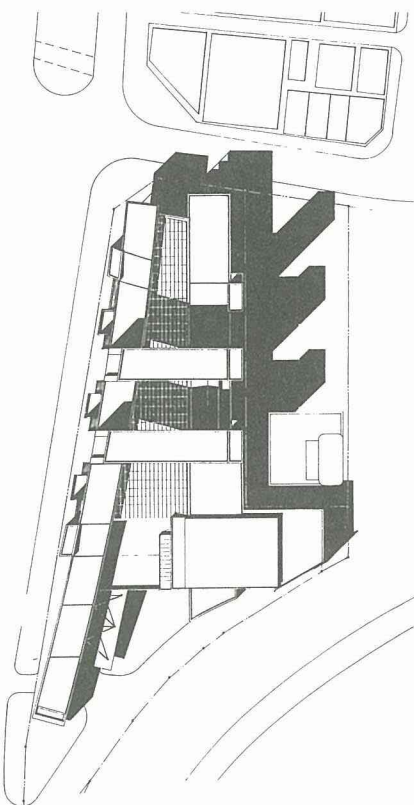


section

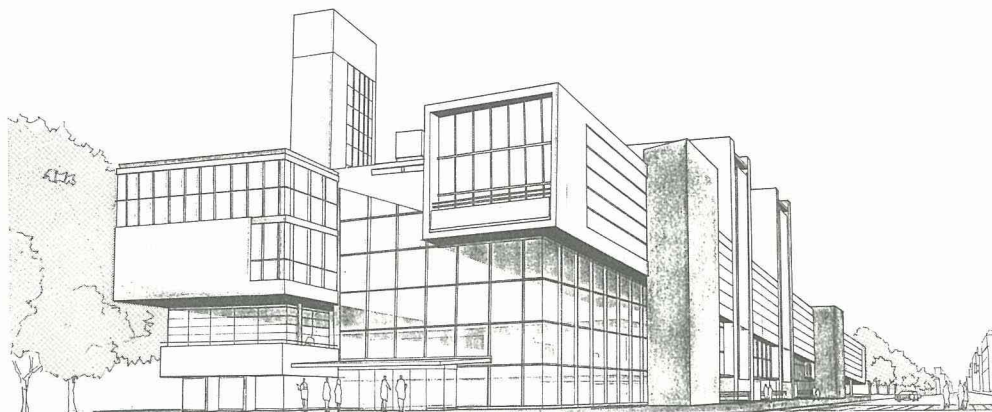
# 画像図書館計画——映像情報を対象とした情報公開のための公共施設提案

Visual Communication Library Project

秋澤 大 (山下研究室)  
Masaru Akizawa



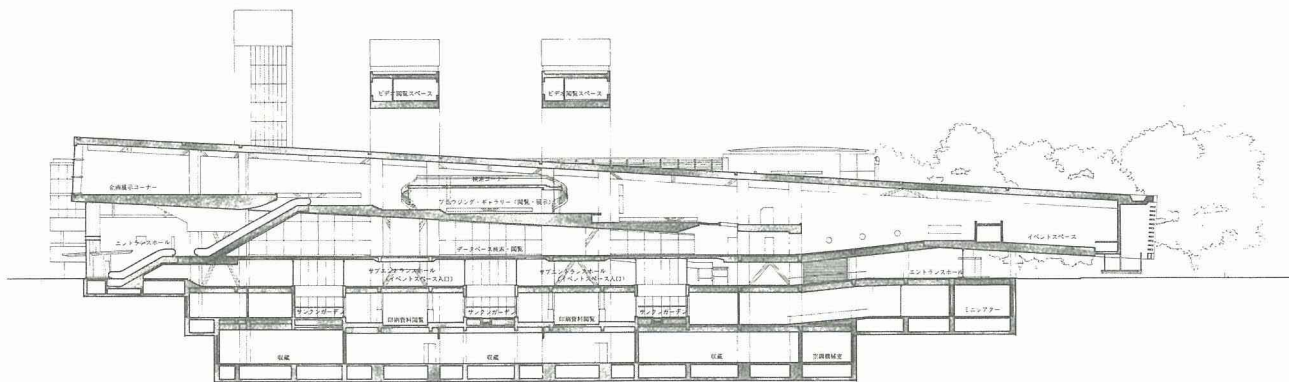
site plan



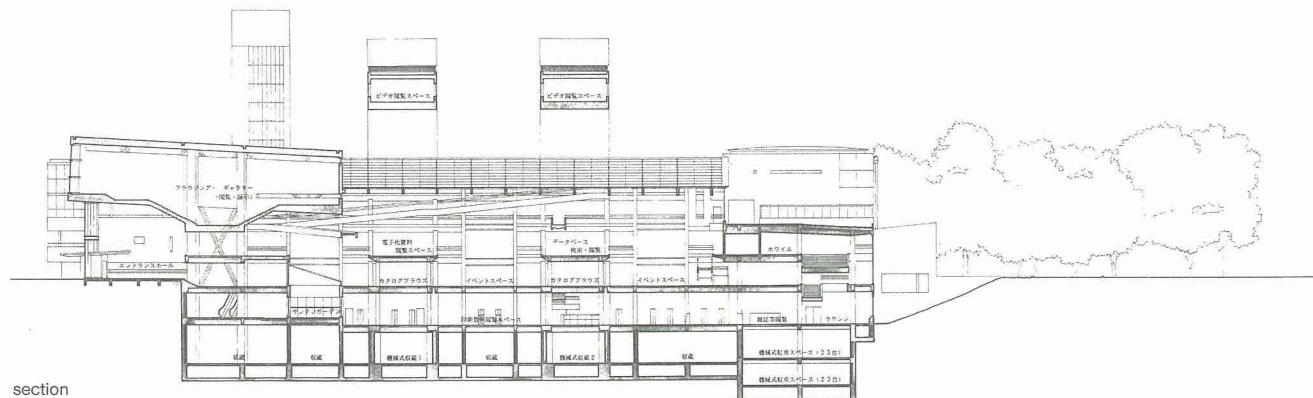
northwest perspective

■写真・ビデオなどの画像情報を対象として、通常の書籍に対する図書館のような役割をする施設というのが、設定したプログラムである。図書館に限らず、現在のさまざまな公共施設の機能的な枠組は形骸化しつつあるが、そこでおこる施設像の変化を、機能的要求の面だけでなく、そこを訪れる人の行為や心理状況に対応した空間の形式の変化として表現することが計画の目標だった。■施設内部にはさまざまな情報メディアの閲覧スペースや講演のための機能などが含まれているが、こ

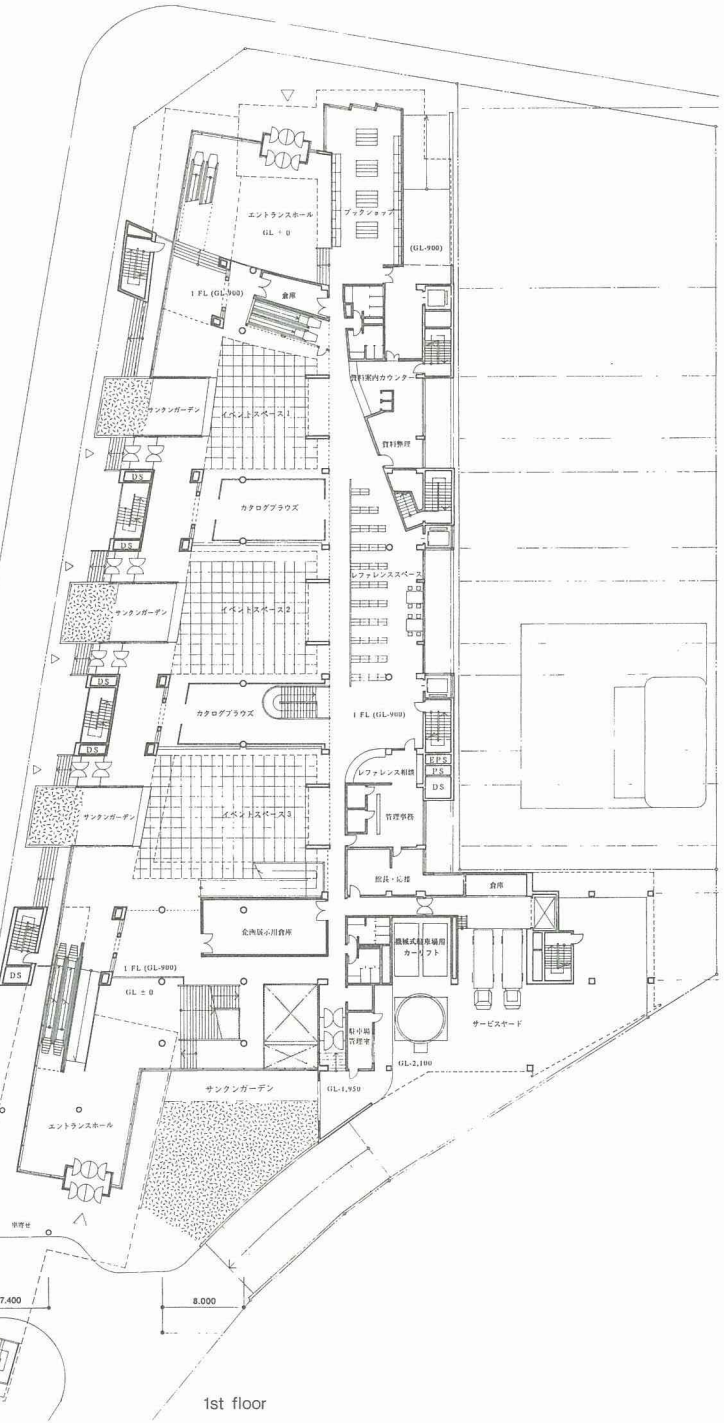
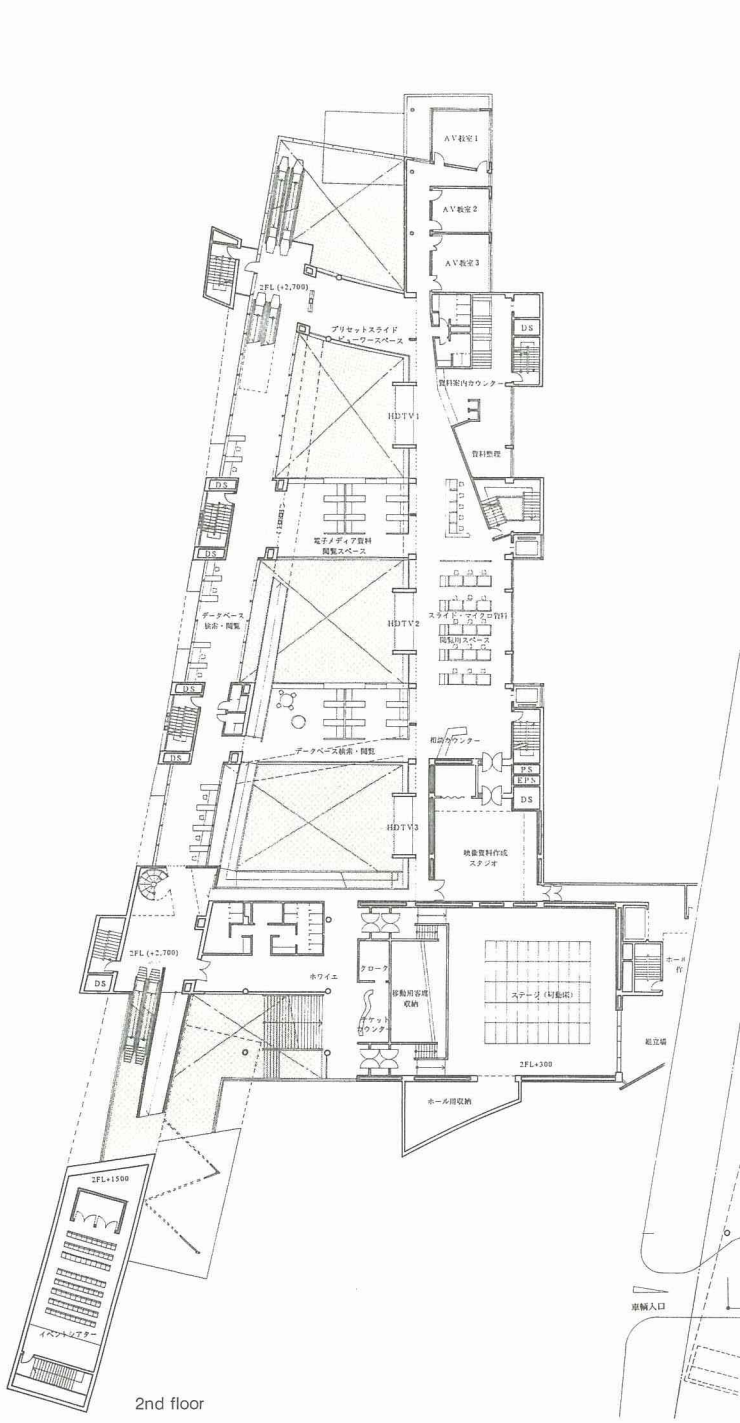
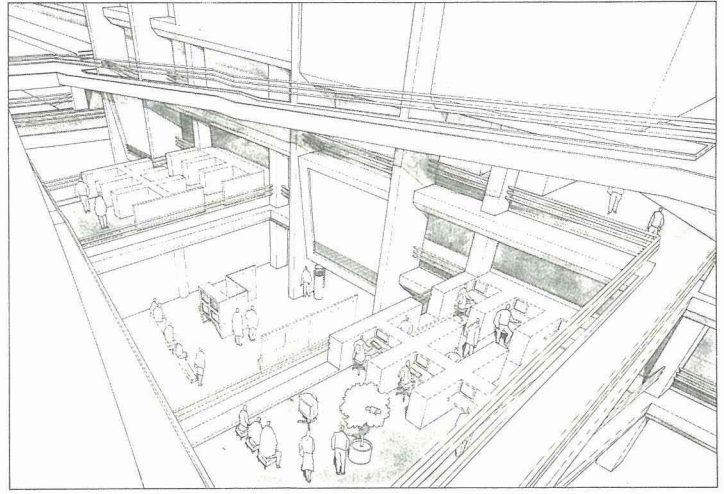
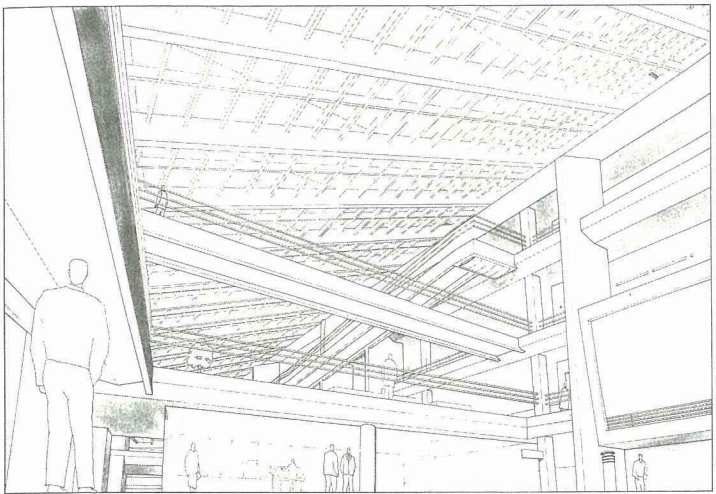
のような固定的な機能をもつ部分以上に、機能的な位置づけが明確でない部分が空間構成の中心となっている。■データベース検索と展示機能が複合された弓型のボリュームは、内部での人の移動にもなって断片的な視線の交錯がおこる場となる。企画展示のためのイベントスペースとなるアトリウム空間は、周囲の多様なスペースと視覚的な連続性をもつ、殻（エンクロージャー）のない劇場として性格づけられている。



section



section



# 東京——美しくクレイジーな生活の場

TOKYO——a beautiful crazy places of life

非常勤講師

**ヴォルフガング・デューリング** (建築家・アーヘン工科大学教授)

Wolfgang Döring, Architect, professor at technische Hochschule in Aachen

ヨーロッパの建築家である私にとって、東京は生きている建築を体験させてくれる場所である。ここでは街並みの細部にとどまらず、都市の構成まで、すべてが常に変わりつつある。18年前、1975年に初めて日本を訪れた時と比べて、さらに急速な破壊と建設が進行している。劇場の舞台のように、演技の背景は今も変わりつつある。しかし、この戯曲の作者は、相変わらず観客に姿をみせようとはしない。

伝統とはいったい何なのだろうか。何が日本に残っているのだろうか。たとえば、京都では美しい木造の町家が姿を消し、変わっていったところにスーパーマーケットが建っ

ている。また京都の町のスケールは、以前とは別の大きさになってしまっている。しかし、そこでの人びとの生活は18年前と変わっていないようにみえる。京都は、そこに住む人びとのための町であろうか。あるいはビジネスのための都市に成り下がってしまったのであろうか。その昔、ドイツが森であった頃、京都は文化の町であった。

建築の意味に関する古くからの質問には、古くからの意味の中で答をだす必要がある。建築は、そこで働き、生活し、祈る人びとのためにあるはずである。

日本では、とても美しい細部や人びとの礼儀正しさの中に伝統が残っていると、私は感

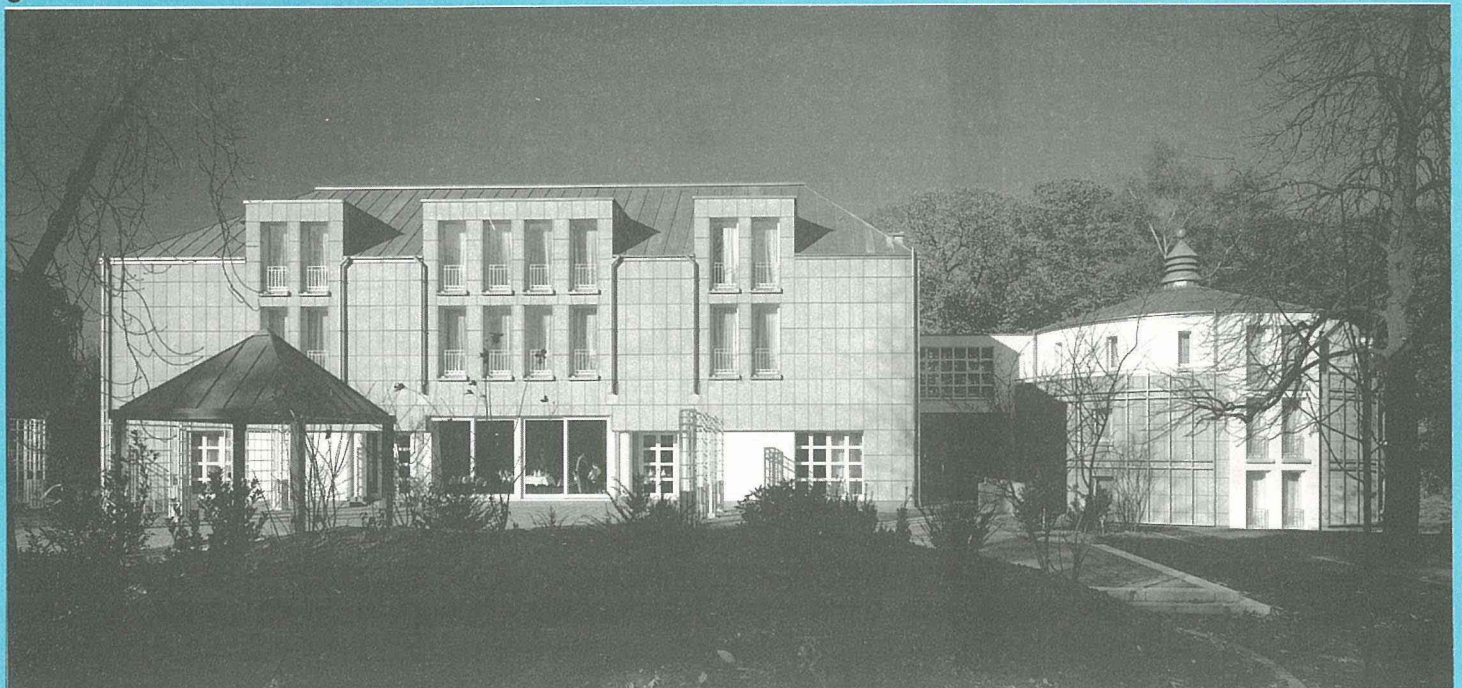
じている。都市文化のイメージは、小さな村の中ばかりか、どんな町の中にも残っている。東京の中心地区は、新しく生まれた性格を持ち、一瞥しただけでそれは交通や情報や広告から生ずる形であることがわかる。しかし、それすらも超巨大都市東京の中に残っている村的な構造によって分断されている。

東京をヨーロッパの他の諸都市と比較することは困難である。都市の形やスケールのどれが正しく、またどれが誤っているか、あるいはそれが美しいか、さらに近い将来どういった姿をとるべきか、といったことはだれも答えられない。この超巨大都市東京では、どんなことでも可能だということを人びとは学



ヴォルフガング・デューリング Wolfgang Döring

- 1934 ヘルリンに生まれる
- 1954 デュッセルドルフ工業専門学校卒業
- 1955 ミュンヘン大学で学ぶ
- 1959 カールスルーエ大学卒業
- 1959~64 エゴン・アイアマン、マックス・ビル、シュナイダー=エスレーベンの事務所に勤務
- 1964~ デュッセルドルフに設計事務所設立
- 1973~ 州立アーヘン工業大学教授 (主任)
- 1989~ CAYC (アルゼンチン・フエノスアイレス) の名誉教授

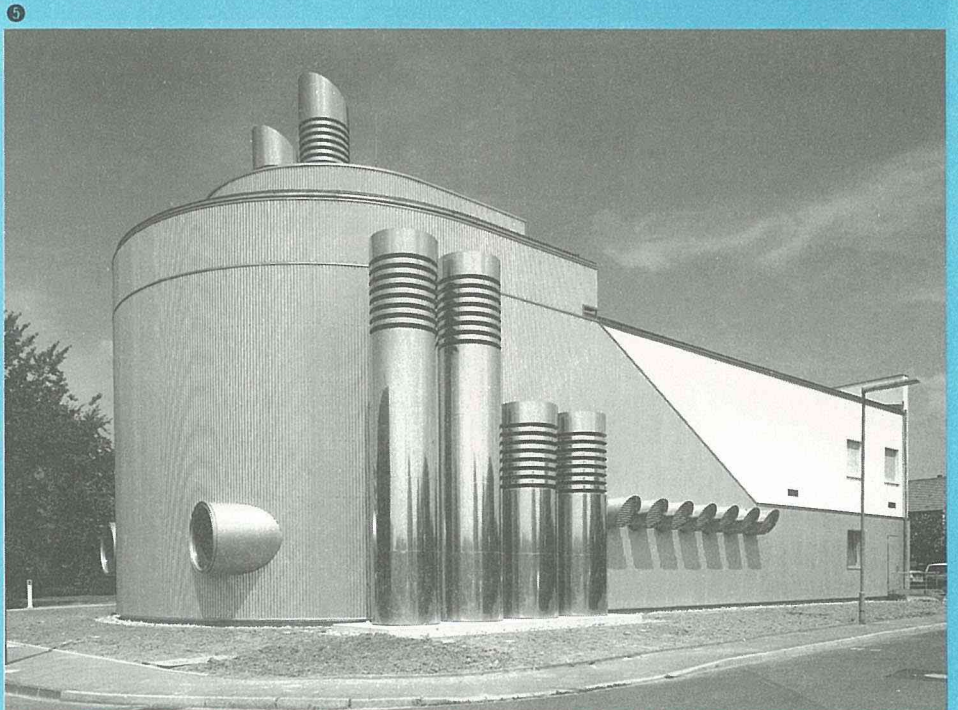
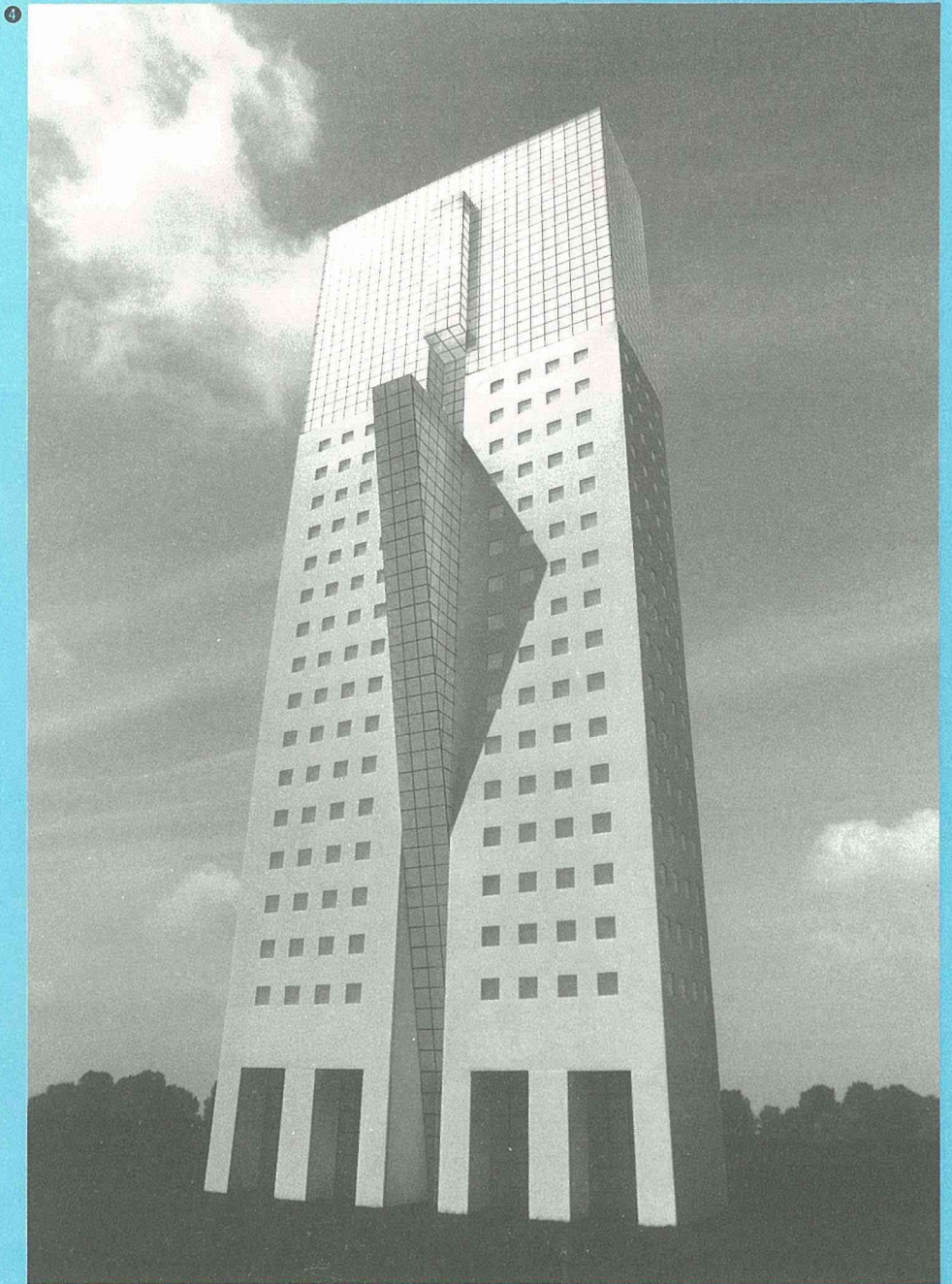
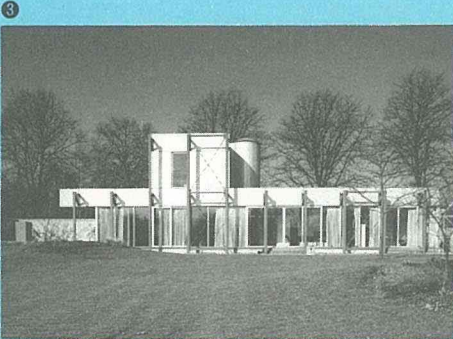


- ① Hotel Rolandsburg photo : Tomas Riehle
- ② Wohnhaus Wabbel photo : Tomas Riehle
- ③ Telekom Düsseldorf photo : Manfred Hanish
- ④ Eurocenter Neuss photo : Elmar Joeressen

ぶであろう。しかし、その中でも人間にとって、材料・形・構造、そして特にスケールに関して適切な選択が必要なはずである。少なくともこのことは、私たちは学生に教えなければならない。現代や近未来の都市計画に関して、正しい本を書くとしたら、そのタイトルとして「交通と情報」だけではありえないはずである。

私は東京で生活すること、そしてこの美しく狂乱した生活の場の雰囲気に参加することがとても好きになった。

(訳：前田哲男・山下和正)



作品介绍 Project

# 柿本デルソル山荘

Villa Kakimoto-delsol

Design: Prof. K. Yamashita + Yamashita Lab.

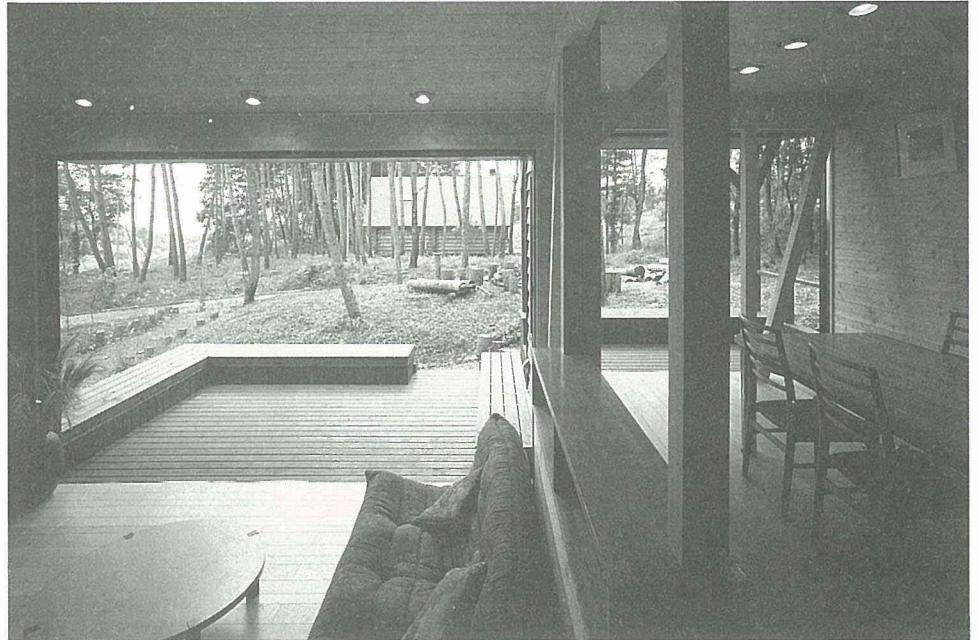
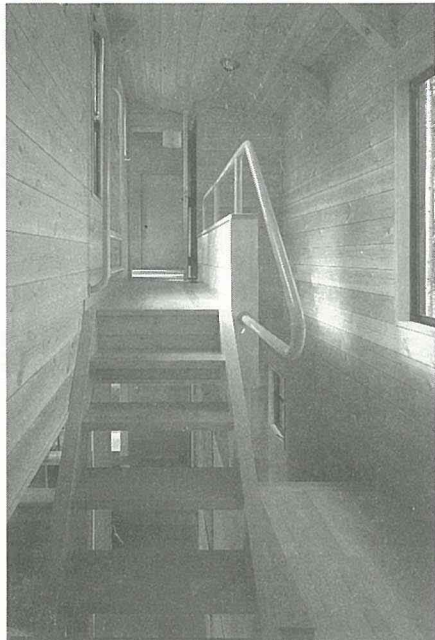
これは研究室の設計活動の一環として、山下教授の指導により、大学院1年生を中心に全員参加方式で行った成果である。基本設計時では研究室内のコンペを行い、建主側の意見により笹海湧君の原案が採用された。実施設計および監理はすべて山下教授の指導のもと全員が分担して行った。



▲正面外観

▼2階への階段

▼居間よりテラスを望む



このプロジェクトは、学生たちが実際に物を作っていく過程を通して建築を学ぶためのものであった。基本計画の段階は7人が約20案を作り、最終的に実現したこの案が建主に使われた。建物は2階建てとし、1階の居間・食堂部分は敷地のなだらかな傾斜を利用し、空間を床の段差で区画しながら全体的に見通せる大空間とした。テラスに面した部分は開放的で扉を開けると内外空間が一体となる。2階の寝室は比較的閉鎖的なものとし、1階とは異なった空間の性格をもつ。自分たちで書いた図面がそのまま実現されたことは、皆にとって初の経験であり、その喜びは忘れられないだろう。(大学院2年 笠海湧)

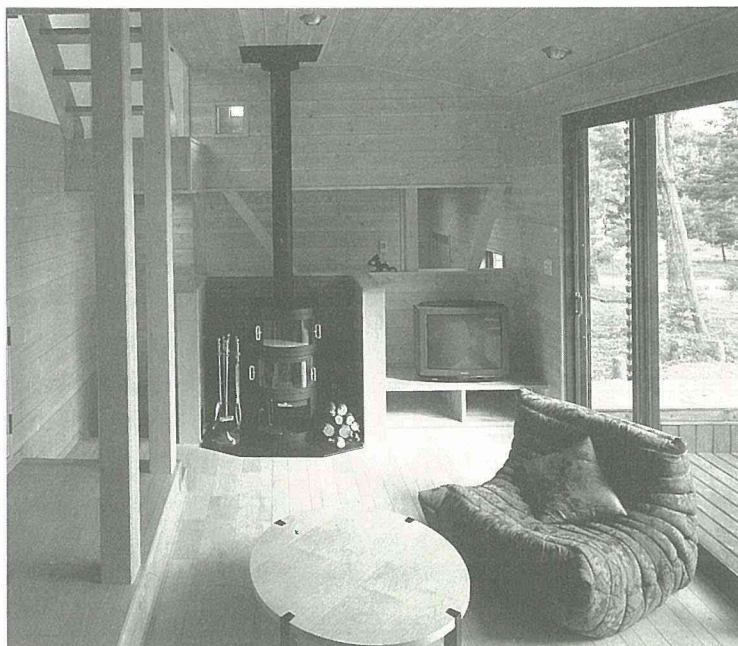
所在地——山梨県小淵沢町  
 主要用途——専用住宅(別荘)  
 設計——東京工業大学山下研究室  
 山下和正・笠海湧・秋澤大・石井大  
 片岡信男・佐々木健夫・中尾武史・山口尚之  
 施工——株式会社  
 設計期間——1991年4月～1991年10月  
 施工期間——1991年11月～1992年5月  
 面積——敷地/441.38㎡ 建築/56.86㎡  
 延べ床/89.16㎡(1階56.86㎡・2階32.30㎡)  
 建ぺい率——12.88%(許容:40%)

容積率——20.20%(許容:80%)  
 階数——地上2階  
 地域地区——無指定(都市計画区域外)  
 外部仕上げ  
 屋根:クボタコロニアル葺き  
 外壁:南京下見板張 厚18(キシラデコール3回塗布)  
 内部仕上げ  
 1階居間・食堂:床 木質フローリング 厚12張  
 壁 横羽目板張 天井 羽目板張  
 2階和室・寝室:床 スタイル畳敷 厚60  
 壁 横羽目板張 天井 羽目板張

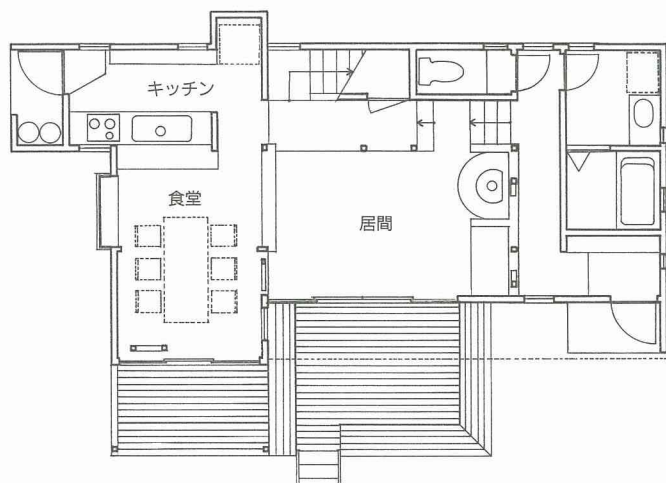


▲背面

▼食堂より居間の暖炉をみる



2nd floor



1st floor



section

## 製図室が木造校舎だった頃

When the draftingroom was made of timber.

後藤一雄 (1936年卒・名城大学教授)

Kazuo Goto, Professor of Meijiyo University (Eng. '36)



後列左より 菊池・内山・谷口先生・石田・岡本・坂本  
前列左より 鎌田・後藤・林

わたしが東工大へ入学した昭和8年頃の大学はいまだに木造校舎で、大岡山の駅を挟んでその南北に校舎が広がっていた。鉄筋コンクリートの建物といえば谷口吉郎先生の設計による水力実験室のみであったように記憶している。(これは後々まで、多くの人びとに東工大のよきシンボルとして眺められた建物である) 本館の建物は工事に着手したばかりで、製図室は石川台に近い一角の研究所地帯の入り口付近の木造のガタピシ校舎であった。

しかしこの製図室は楽しいところで、上級先輩の製図を手伝ったり、それによっていろいろと教えられたり、何しろ大学としては辺境にあつたから、まるで独立国のようで、よかった記憶がある。故二見教授は独身だったので、これを目当てか近くの喫茶店の美人が、先生のところへしばしばお茶を届けに現れ、わたしたちを羨まされたところでもある。

これが一年半後に本館の鉄筋コンクリート造の校舎へ移ることとなって、途端に製図室の楽しみは半減した。これは汚い飲み屋街や長屋の住宅街が、再開発で建築家による立派なビルやアパートになると、それまでの滲みでるような人間とそれを入れる空間との関係が失われて、しっくりいなくなるのと同じである。このことは建築家としてぜひ考えてほしいテーマと思える。それでも昔の『高等建築学』(常盤書房)には、その第2の巻にカフエー・レストラン・ダンスホールなどがあった。しかしそれ以後の『高等建築学』やいろいろな建築雑誌には、このようなものは見かけることができない。これは駅前再開発の大きいネットワークとなっている。(パリの再開発・新都市計画でも同じような悩みを生じているのか、このようなテーマの映画を見たことが

ある。)ポストモダンニズムを考えるなら、このような人間に優しい建築とはなにか、規律と放縦という大きいテーマは永遠のものかもしれないが、ぜひ盛んにしていただきたいものである。

東工大の新本館は立派であるが、どうも学生の製図室としては、具合が悪かった。(もつともこれは谷口吉郎先生には意に反した設計上の要求が押しつけられた結果であったことを釈明しておきたい。これ以後、谷口先生は東工大の建築を手がけられることを長らく拒否されておられた。)具合の悪さは引越して半年後に現れた。製図室で徹夜をしてはいけないうという守衛からの警告である。守衛も古参の人は、建築の製図室は徹夜をするものと承知でうまくやってきていたのだが、新人の守衛は容赦なしなのである。公式のこととなつたから小林建築科長も、適当にやってはいけないというきついお叱りをうけた上に、禁止されることになった。これも飲み屋がビルに入ると、夜間の管理問題で、いよいよこれからが佳境に入らんとするところで追い出されるのと似ている。こうなると学生の設計のやり方は二手に分かれた。ひとつは大学にてこないで家で製図をする者。先輩や同級生、同士の教え合いや知恵の交換(線の引き方、ガラスの反射は絵の具で描いたところを消しゴムで消すといったようなこと等々...)は途絶えてしまう。もう一つは、闇にもぐることとなる。製図室の一角にテントを張り、暗幕で明かりが漏れないようにして、密かに徹夜をする。もちろん夜食を食べたいので、本館北東隅の便所の窓よりドライエリアの手摺りを伝わり、その向かいの垣根の鉄条網をペンチで穴をあけ、道路沿いのソバ屋へ駆け



後藤一雄 Kazuo Goto

1913年 東京生まれ  
1936年 東京工業大学建築学科卒業  
1937年 東京工業大学助手  
1942年 東京工業大学助教授  
1960年 東京工業大学教授  
1974年 東北大学教授、東京工業大学名誉教授  
1977年 名城大学教授  
1988年 S.W.F.研究会会長 現在に至る  
主な著書:『木構造の計算』『住宅の工場生産』『図解建築構法(共著)』

込むという手段である。(現在は、学生運動の盛んな時に塀が強化されて以来、不能になったようである。)もつとも悪いことばかりではなかった。3階東南隅の会議室では、向かいのうなぎ屋の2階で女将が着替えをするのが丸見えだったので、ために会議がしばしば中断することにもなった。

実験室の管理は、海軍上りの小茂鳥さん。名前の優しさとは反対に大変厳しく、試験機は常にピカピカに整備されているが、うっかり機械に足をかけて操作しようものなら、やりに足を蹴飛ばされてドヤされ、縮み上がらせられたものである。

ある。)ポストモダンニズムを考えるなら、このような人間に優しい建築とはなにか、規律と放縦という大きいテーマは永遠のものかもしれないが、ぜひ盛んにしていただきたいものである。

東工大の新本館は立派であるが、どうも学生の製図室としては、具合が悪かった。(もつともこれは谷口吉郎先生には意に反した設計上の要求が押しつけられた結果であったことを釈明しておきたい。これ以後、谷口先生は東工大の建築を手がけられることを長らく拒否されておられた。)具合の悪さは引越して半年後に現れた。製図室で徹夜をしてはいけないうという守衛からの警告である。守衛も古参の人は、建築の製図室は徹夜をするものと承知でうまくやってきていたのだが、新人の守衛は容赦なしなのである。公式のこととなつたから小林建築科長も、適当にやってはいけないというきついお叱りをうけた上に、禁止されることになった。これも飲み屋がビルに入ると、夜間の管理問題で、いよいよこれからが佳境に入らんとするところで追い出されるのと似ている。こうなると学生の設計のやり方は二手に分かれた。ひとつは大学にてこないで家で製図をする者。先輩や同級生、同士の教え合いや知恵の交換(線の引き方、ガラスの反射は絵の具で描いたところを消しゴムで消すといったようなこと等々...)は途絶えてしまう。もう一つは、闇にもぐることとなる。製図室の一角にテントを張り、暗幕で明かりが漏れないようにして、密かに徹夜をする。もちろん夜食を食べたいので、本館北東隅の便所の窓よりドライエリアの手摺りを伝わり、その向かいの垣根の鉄条網をペンチで穴をあけ、道路沿いのソバ屋へ駆け

込むという手段である。(現在は、学生運動の盛んな時に塀が強化されて以来、不能になったようである。)もつとも悪いことばかりではなかった。3階東南隅の会議室では、向かいのうなぎ屋の2階で女将が着替えをするのが丸見えだったので、ために会議がしばしば中断することにもなった。

実験室の管理は、海軍上りの小茂鳥さん。名前の優しさとは反対に大変厳しく、試験機は常にピカピカに整備されているが、うっかり機械に足をかけて操作しようものなら、やりに足を蹴飛ばされてドヤされ、縮み上がらせられたものである。

# 建築設計教育に寄せる

On Architectural Education

## 中島 隆 (委員長・鹿島建設専務取締役)

TIT設計教育研究会は、1990年に山下和正教授をはじめとするデザイン系の先生方のご尽力により発足しました。常日頃、先生方が考えてこられた設計教育のあり方に対し、国立大学という制度の中でのむずかしい面を、協力し支援するために、日建設計の林昌二氏、アーキビジョンの戸尾任宏氏、および大学の方々と共に運営に当たり、その設立主旨にご賛同いただき会員になっていただいた、個人・建設会社・設計事務所等の貴重なご寄付(会費)によって、今日まで参りました。これらの方々に対し、心から深く感謝いたします。

御高承のように、当研究会のこれまでの活動は、機関誌『華』の刊行をはじめ、大岡山建築賞の創設による学生の表彰、海外建築家を含めた学外の講師の招聘、著名な方々の特別講演等、従来の東工大の設計教育からみれば意欲的な内容であります。

機関誌『華』をはじめとする諸々の活動が、東工大生に計り知れない影響を与えたこと、これまで学外の方々にはなかなか伝わりにくかった大学のことについてもビジュアルに伝えられたことは、多くの学外者からも高く評価されております。これも会員の皆様方の一方ならぬご支援の賜物と確信しております。

さて、当設計教育研究会の運営活動・委員等については発足してから3年後に見直すとの前提でスタートし、今日まで活動を推進してきましたが、活動主体となっていた山下教授の退官に伴い、当研究会担当として仙田満教授が継承されることになりました。当活動が内外からも高い評価を受けていると聞くにつけ、この3年間の実績をさらに発展させてくださることを期待しています。なお、運営委員会のメンバーについてもこれを機に見直し、新しいスタートをきることを思います。この3年間、運営委員長を務めさせていただき至らぬ点も多々ありましたが、東工大の設計教育に一石を投じた成果を考えますと、大

変意義が深かったことと思えますし、この間に育成された学生達が、これからの社会で大いに活躍されることを期待しています。

長い間、ご協力していただいた方々に感謝するとともに、今後の活動をさらに応援させていただきます。

## 林 昌二 (副委員長・日建設計副会長)

長く設計の仕事に携わり、新人たちを毎年職場に迎えてきて、今感じていることを記します。

昔は社会の変動が遅かったために、学校で教わったことがほとんどそのまま、一生役に立ったのですが、近年は数年で陳腐化してしまうようになりました。大きな声でいえる話ではありませんが、世の中と接触の少ない先生の場合など、教わる時点でもう時代後れの内容だったりするかもしれません。企業が存立をかけて研究開発に凌ぎを削っているのに較べて、多くの大学は学制の傘に保護されて自己改革に熱心ではありませんから、その差は開くいっぽうです。

しかし、かりに研究開発の主力が企業に移ったとしても、大学の役割りは失われなければ、かえって存在の意義は明らかになってくる、と私は考えています。建築学科の教育が、建築技術の学習にとどまるものではなく、建築「設計」教育であることの意味が、そこにあります。

建築は人びとが生活する場をつくる仕事です。「人は建築を作る。すると次には建築が人を作る。」とは味わい深いことばです。私たちは一日20時間ほどを建築物の中で過ごしますが、あとの4時間も建築が目に入らない時はありません。良い建築に接してられる人と、貧しい建築環境に暮らさざるを得ない人との違いを考えると、建築が人の一生と社会の未来におよぼす影響ははかり知れないものがあります。

良い建築環境とはどういうものなのかを体

得し、それをつくるにはどうすればよいのか、何がそれを阻んでいるのか、阻んでいるものと闘うにはどんな武器が必要なのか。そうした基本をじっくり考える場として、大学ほどふさわしい場はほかにありませんし、一生を通じて誤りない、建築物をつくる者の倫理・思想を学ぶこと、また、時代に関わらないモノづくりの基礎を身につけることは、大学時代でなくてはできないことです。

建築「設計」教育とはそういうものだと、私は思っています。

## 戸尾任宏 (運営委員・監査役・建築研究所アーキビジョン代表取締役)

建築を志す学生にとって、建築設計教育は建築のいろいろな分野の学習をふまえながら、建築に求められるさまざまな課題を形にして表現する能力を養う意味で極めて大切である。それは社会からみれば各分野の学習あるいは研究そのものよりもはるかに大切であるといえよう。

明治以来、工学としての建築が諸先輩の研鑽によって、国際的にも高い水準に達していることはだれもか認めることである。しかし、これからは一刻も早く工学としての建築でなく、人間の生活環境としての都市や建築空間のデザインという視点を重視した建築教育に切り替えるべき時がきていることを認識しなければならない。それは社会の要求でもある。

その意味で『華』の発刊にみられる東工大の設計教育の一端は、極めて意欲を感じとれるものであり、その展開は大変期待できるものである。また東工大関係者以外の人たちにも東工大の設計教育が目に見えて伝わり、その評価はなかなか高いものがある。『華』が送られてくるのを楽しみにしている人も多い。

東工大において視野の広い建築教育が行われ、社会の要求に応え得る人材の育成が進展することを願うものである。

山下和正 (TIT建築設計教育研究会運営委員)

Kazumasa Yamashita, boardmember, TIT society of architectural design education

## はじめに

『華』の創刊号(1991年・春)から4号までの中で、「私の設計教育論」というシリーズを設け、東工大建築学科のすべての助教授、教授に執筆をお願いし、ほとんどの方から原稿をいただいた。私にとってあまりにも大きなこの問題について、私は「いずれ、まとまった形で発表したい」と書いたことを覚えている。私はこの3月末をもって大学を辞めた。辞めるに際して、「私の設計教育論」を書くことになるのは少々残念なことであるが、辞めるからといって、設計教育の将来に対して決して悲観しているわけではない。多くの大学において、設計教育は必ずしもうまく運営されているとはいえないが、うまくゆくやり方はあり得ると思われるし、私としては3年2カ月の間に、多少ともそれを試みることができたと考えている。私は大学の外の設計活動と、大学の中との両方の立場でものを見、考える機会を与えられたわけであるから、私の設計教育論は関係の方々への参考になることが多少はあろうかと思う。

## 建築設計教育の問題

今、日本の大学で設計教育に問題を感じていない大学はないといってよいだろう。

一般建築誌にも、ときどきこの問題が取り上げられ論ぜられているし、昨年8月の日本建築学会の大会(研究協議会)でも、このテーマが取り上げられた。学会大会では、各パネリストの発言の前に、多くの大学における設計製図の授業の実態調査が発表されたが、その授業内容や学習年次など、大学間におけるバラつきが大きいことがわかった。この時のメインテーマは2つあり、ひとつは「我が大学における設計教育の上での特色のある試み」であり、他のひとつは「設計教育においてCADは有効か」というものであった。討議の問題点の主なものは、討議の範囲の中に大学院は含まれていなかったためか、大勢の学生にどう対応して教育の質を向上させるか、またいかに学生の興味を引かせ、設計作業に高い関心を持続させるか、などといったものであった。

また、新日本建築家協会(JIA)でも、資格検討委員会において、「建築家に求められる素養と能力」について検討する中で、大学のカリキュラムをチェックする作業が行われている。これは、アメリカではNAAB(全国建築教育許可協議会)という組織があり、全米の大学・大学院の建築教育が、建築家を養成するにふさわしいカリキュラムとなっているかをチェックする形をとっていることから、JIAでも予備検討を始めたものである。このほかJIAでは日本の従来の建築設計教育の問題点を見直す意味から、建築家養成のためにもっともふさわしい教育機関「JIASchool構想」を検討している。

そもそも日本の建築教育は、よく知られているように、世界でも特異な内容となっている。日本の大学の建築学科は、一部美術学部のもの以外は、ほとんどが工学部に属し、学生は工学技術を中心として建築に関わるほとんどの学問をまんべんなく修め、設計もその一部として存在する形となっている。欧米など諸外国では、建築学科といえば建築設計の学習がその中心目的であり、工学技術はその手段として概要を学ぶのみである。歴史や美学も同様に、その手段の一部として学ぶのであって、決して目的ではない。したがって、構造や設備や施工などは、他の学問分野とみなされ、それらの学生が同一学部に属するという観念はもともとないわけである。

日本の建築教育がこのような形になったことについては、それなりの歴史的経緯があるわけであるが、なぜこのような自明のことを、ここで改めて述べなければならぬかといえ、その歴史的経緯のツケが、今改めて問題になりかかってきたからである。

すなわち、日本の大学の建築教育内容は、専門別分化があまり進んでいない明治・大正時代のような産業構造の社会では非常に有効であるし、建築家となるべき学生にとっても、設計以外の分野についても、一般教養として身につける点でも有効であった。しかし、建築の産業規模が大きくなり専門別分化が進んでくると、当然ながら4年制大学の中での専門的教育は難しくなり、特に設計のように修

業に手間のかかる分野については、まったく中途半端な学習しかこなせなくなったわけである。当然、その不足分に対して大学院が期待されるわけであるが、設計教育という点でまだ十分に整備されていないのが実情であろう。

早稲田大学では、建築学科が理工学部をなれ建築学部となり、その中に建築学科(デザイン)、建築工学科(技術)、都市計画学科、環境学科等がおかれる構想が決定された。ディテールについては、まだこれから議論があるようであるが、大筋においては、現代社会が上記のように専門別分化教育をすでに必要としているという認識に基づいて、改革が行われようとしているものと思われる。

大学での設計教育の問題点は、ひとことでは言え上記のようなたてまえとしての建築総合教育と、その一部として位置づけられる不完全な設計専門教育との共存が、いよいよ難しくなっていることといえよう。

## 東工大における設計教育

建築家を育てるという立場から、東工大の建築学科の現状をみると、システムの上でいくつかの問題点がある。これは全国の多くの国公立大学でも多少とも似たような問題があるかもしれない。

第一に、将来設計に進みたい学生が以前より圧倒的に増えてきたことである。そのこと自体悪いことではないが、問題は学科内体制がこれに必ずしも十分に対応していないことである。建築学科自体に人気が出てきて大学内でいつも定員以上の希望者がでるようになったのは、25年以上も前からである。現在でも第6類(建築・社会工学・土木の建設三学科)の中で、常に建築への希望者が定員(60名)を超過し、入学試験に受かったからといっても、建築学科へ入るためにはさらに一年次の学業成績による競争があることになる。問題は二年次に建築学科に入った時点で、ほぼ2/3の学生が将来設計の仕事に就きたいと考えているのに対し(ある大型私立大学では80%であるという)、四年次の卒業論文や大学院の修士論文(制作)の指導をする設計やそれに近い分野の教官(研究室)の数は極めて

少ない(20%前後)ということである。もちろん、単に学生が希望したからといって、そのまま安易に設計方面に進むことを認めてよいという点には、問題があるかもしれない。しかし、せっかく東工大の建築学科に入ってみても、多くの学生が実は希望どおりの勉強が簡単にできないような仕組みになっているという点は、やはり問題であろう。

学生の設計方面への希望増加は、たんに「若者の3K嫌い現象」といってすませるのでなく、社会構造の変化ととらえて、学科として学生の技術ばなれの傾向に、正面から取り組まなければならないだろう。そのためには、技術系の授業を面白いものにする工夫ばかりでなく、永年固定化している講座の専門別再配分、研究室への学生所属の数による自動的配分(希望しない研究室へ学生を無理に所属させることが多く起こる)の是正など、根本的に改革すべき点は多い。どこの官庁組織でも起こりやすい問題であるが、文部省より獲得した講座を利権と考え、時代に即した改革を行うことを忘れ、その権益を守ることのみ汲々とするのがあってはならない。

設計教育にとっての第二の問題点は、学科内の論文偏重の価値観である。工学技術や歴史や計画学のみが教育や研究の対象であれば、論文のみがその成果だということはあるはいえるかもしれないが、建築家を育てることが学科のひとつの目標となっているのであれば、設計図もひとつの立派な教育や研究の成果である。設計の学習はとかく手先の表現テクニック、現実的な問題対応、皮相的な設計手法の集積程度と考えられ、各種学校でも十分対応でき、その程度のことであれば大学院で教育する必要はない、などと議論されることがある。しかしこれは諸外国のすべての大学・大学院の実態をみれば明らかなように、大きな認識不足である。建築家の教育は、中途に実習期間を設けるなど時間がかかるものと考えられている。また、設計にはそれ自体の理論があり、社会・歴史の中においてアカデミックな教育の場が必要とされている。(授業内容をアカデミックにという意味ではない。)

従来、学科内で卒業論文の代わりに制作を行うことを認めていたものを、昨年度より中止してしまったのは、学生の設計への取り組みを本格的に行うきっかけをなくすものであり、誠に残念な結果であった。設計を論文の形で発表することはできないとする私の立場に対して、計画(学)は論文にし得るということがその反論としていわれているが、計画学(構造系や材料系に対して、歴史・意匠・計画・環境・設計は一括して学会風に計画系とよば

れている)と設計とは、はっきりと区分された別のカテゴリーである。学者には論文が命であると同様、建築家には設計図が命なのである。また、技術系の卒業研究は指導とはいっても、研究室が行っている研究テーマの一部を手伝うことになる場合が多く、多少とも学生の自主性が尊重される計画系の研究室に、所属希望の学生が多くなるということは、よく学生間でいわれているところである。

以上は主として建築学科全体としての問題であるが、第三の問題は設計教育の内容的な問題である。私が建築学科に来て、設計製図授業の運営で最初に感じた問題点は、設備・構造・その他の専門家の協力がまったくなく中で設計が行われていたということである。プロの建築家ですら、設計の初期的段階から多くの専門家のアドバイスを必要とするにもかかわらず、大型施設の課題をだされた設計経験のない学生に、そのような相談のできる場を提供していないのはまずいのではないだろうか、という素朴な疑問である。もちろん、専門分野の教官が協力すればよいわけであるが、いくら相手が学生であっても、学者に設計コンサルタントの役割は難しい。しかし、予算すなわちお金さえあれば解決可能であるとのアドバイスを得て、本会(TIT建築設計教育研究会)を設立していただくことへ発展したわけであった。本会の設立によって、技術コンサルタントの協力体制をはじめ、関西の建築家や外国人建築家の招聘まで可能となり、その他機材の購入、賞の設置など、大きな恩恵を受けたことは感謝にたえない。

しかし、お金で解決できる問題について、問題がまったくなくなったのではない。製図室の狭小化(1クラス45人定員を想定した施設で、現在60人定員となっている)、CAD教育の対応の遅れ、不十分な図書室の整備など、あげればきりがないところである。いっぽう、お金と関係のない問題としては、カリキュラムの整備があげられる。特に大学院において建築家養成の道すじを設け、それにふさわしい授業を整備してゆくことは、これからの課題である。また、大学院授業(設計製図)のレベルもそれにふさわしい高さを維持すべきであろう。設計の分野ではよく何でも自由だというように考えられ、教える側ですらその論理性を問わない姿勢がみられるが、設計とは感覚的であると同時に、論理的な存在であることは当然のことである。

## 将来にむけて

大学を辞めた者が大学の将来に対して意見を述べることは、あるいは慎まねばならないか

もしれない。しかし、一般的な大学での建築設計教育に対する意見であれば許されるであろうから、東工大を含む一般論と考えていただきたい。本誌の創刊号の「私の設計教育論」で述べたように、現状の設計教育は、一般教養的トレーニングのひとつとして全学生に対応するものと、将来建築家を目指す学生に対応するものとの、ふたつを念頭において考えなければならないという面がある。

設計教育の将来像を探るにあたって、当面の短・中期の改善を考えるのであれば、このことを前提としなければならない。それはすでに述べたように、従来のものに建築家養成をはっきりと念頭においたデザイン系のカリキュラム構成を加え、多人数の学生に丁寧に対応できるよう設計関係の教官数を増やすことであろう。具体的には3年生後期ぐらいから設計製図を技術系学生とは内容的に分け、デザイン系学生には4年次にもう少しレベルの高い設計製図の授業を行うべきであろう。もちろん大学院においては、デザイン系については設計製図を中心的授業とする必要がある。学生の傾向に迎合するというのではなく、時代の要求するところをしっかりと受け止め、設計を重視する姿勢を打ちだすことが、時代に取り残されない道であろう。

長期的に将来像を考えるとすれば、早稲田大学のように何らかの形で技術系とデザイン系を学科として分離することであろう。もちろん両者は同じ学部にも所属していてもかまわないし、またその方が共通の授業をシェアできる便もある。現在のように職業が分化した中での共存は、すべてが中途半端となり、また教官間の力関係による両者の勢力争いが起こりやすく、害の方が大きいのではないだろうか。独立すれば、前にも述べたように国際的な眼で見てこの方が一般的であり、建築家の業務の国際交流が増えつつある中で、益することも多いと思われる。また、関連のデザイン分野である工業デザイン、インテリアデザイン、ランドスケープデザイン、都市設計などに対して距離が近くなり、建築家が関わる世界がさらに広がりやすくなるように思われる。

いずれにしても、設計教育にはまだ未開拓の部分が多く残されていて、現行の大学制度の中でも多くのことが実行できるように思われる。今後の発展を大いに期待したい。3年間、何かにつけてアドバイスをいただいた同僚の先生方や、設計教育の側面的支援をいただいたTIT建築設計教育研究会の運営委員会役員および会員の方々に対し、深く感謝申し上げます。

## 家具デザインのお仕事についてお聞 かせください。

高浜 イタリア家具のプロデューサーであるD.ガヴィーナ氏に招かれて、ポーロニャに渡ってから30年になります。これまでのイタリアでの仕事をまとめるかたちで、先日、千駄ヶ谷のGAギャラリーで展示会を行いました。タイトルを「解后開花 結実」にしたのは、私自身がイタリアでみいだされて、その果実としての作品を展示したということからです。

私には特定の素材やかたちにそれほどこだわりはありませんが、椅子の脚部など細い部材をシャープに曲げるときにはスチールの無垢材を使っています。軽い感じのデザインの「TULU(1969)」という椅子を、GAギャラリーでは、まるで鶴が空を飛ぶように高く吊ってみようといったのですが、ちょっと無理でした。(笑)

## イタリアでは建築の実作があるとの ことですが。

高浜 1976年にカルチネッリの家具工場とその本社の建物を設計しました。あとは建物全体ではなくてインテリアの仕事です。イタリアでは建築の改修の仕事はあっても、新しくつくる仕事は多くないんです。建築家とよばれる人びとも家具やプロダクトデザインを手がけるのが普通です。

## 家具と建築のデザインの違いは何で すか？

高浜 家具と建築では、要求される機能が違いますが、クリエイティブな姿勢においては変わりません。ただ私の場合はいつも、デザインから余分な表現を取り除く方向にあるようです。ミースのいう「THE LESS IS THE BETTER」の

## 高浜和秀さん(1953年卒) を訪ねて

Visiting Mr. Kazuhide Takahama

### 先輩、元気ですか⑥ Talks with Well-known Alumni

考え方です。たとえば一振りの日本刀にデザインの原点を感じたりします。

### 学生頃の話をお聞かせください。

高浜 もとはといえば東工大には電気で入ったのですが、緻密にコツコツというのか性に合わなくて(笑)。そんな時先輩がやっている油絵がとてもおもしろそうに感じられたんです。半年で建築に転科させてもらいました。終戦後間もない頃のことです。いつもお腹を空かせていたのを覚えています。

### 家具デザインを手がけるようになったきっかけは？

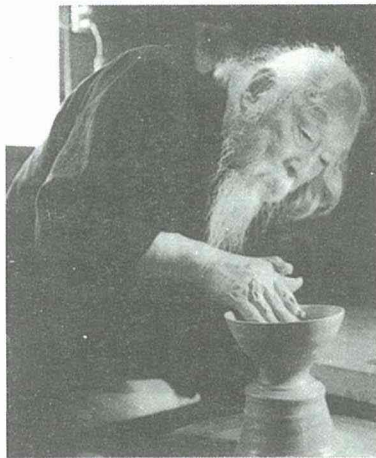
高浜 それも偶然なんです。清家研究室の研究生として過ごした後、ミラノ・トリエンナーレの仕事でイタリアに渡ったのが1957年です。その会場でガヴィーナ氏に出会わなければ、家具デザインを本業にすることはなかったでしょう。話は変わりますが、その後ポーロニャの私の家によく遊びにきてくれたカルロ・スカルパは、どこにいても(トイレの中でも)デザインの詳細を考えてスケッチをしている人でした。彼のように私も、まるで板前が包丁一本で食べていくように、鉛



### 高浜和秀

1930年宮崎県生まれ  
1953年東京工業大学建築学科卒業  
1957年ミラノトリエンナーレ日本ブース担当。熊本大学建築学科助教授  
1958年ガヴィーナ社より、ソファ〈NAEKO〉発表。  
1963年ポーロニャに渡る。椅子(TULU)他を発表  
1976年シモン社工場(伊)の設計担当  
1991年椅子〈ISIDE〉他を発表  
1992年東京GAギャラリーにて作品展

デザインから余分な表現を取り除く方向へ向かっている。



## 現在は作陶活動に専念されているそ うですが？

加藤 冬は沖縄、夏は軽井沢で高麗茶碗を作っています。これは轆轤ろくろで引いたままのもので、もっとも手数がかからず、材料の無駄が少ない茶碗で、かつ用途に合うものもつ美しさに魅力を感じています。その代わりに土が重要になりますが、沖縄は地質学上、さまざまな種類の土を手近に手に入れることのできる場所です。人間とは違って、粘土は私の思う通りになってくれますので、それとつき合っていることが楽しいのです。私のように元来、陶芸の専門家でないものにとっては、領域を狭く絞り込むことによって、その道の専門家の芸に近づくことができますし、またそうでなければ面白くないでしょう。「趣味を探すと」一般にいいいますが、私は趣味とは自分の興味のあるところにおのずと出てくるべきものだと思います。

## どのような経緯で陶芸をお始めにな ったのですか？

加藤 東工大の助手時代に質素な材料を用いながら、あれだけの空間をつくりだす茶室建築に興味をもちました。これをより深く理解するためにお茶も始めたのですが、茶道はものが乏しいところで工夫して生活する世界であるため、戦争中でもできるものだったのです。ここから、さらに器である茶碗を作ることに興味をもつようになりました。直接には、愛知での学会の会合の帰りに、常滑にある堀口捨巳氏設計の陶芸研究所に寄り、そこでアトリエを見たのがきっかけです。以来今日まで、私はあるがままの中で創作することを心がけています。「九九 元来

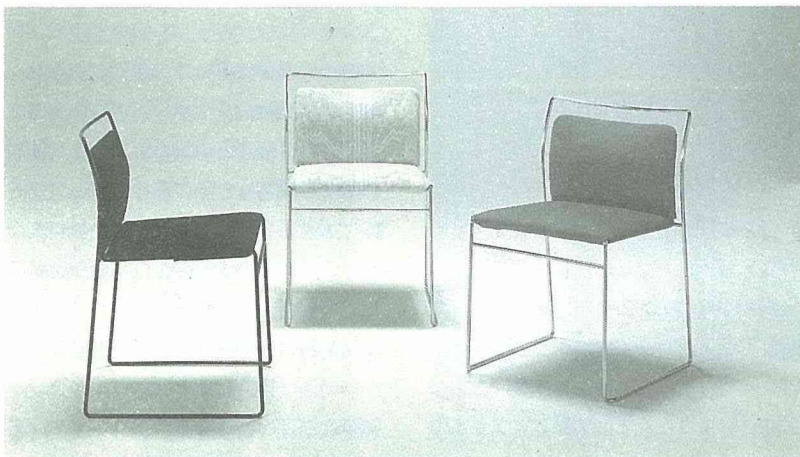
筆を片手にして、世界をめぐり歩くような仕事がしたいものだと思っているんですよ。

### 今の学生に一言お願いします。

高浜 トリエンナーレの会期中、私は本物のデザインを目のあたりにすることで勉強しました。ネーミングにとらわれなくて、とにかくいいものをたくさん見ることです。そうすれば目が効くようになって、偽物はすぐ分かるようになります。よかったら骨董屋をまわってください。



ANTELLA 1977



TULU 1969



GAJA 1978

あるがままの中で創作することを心がけている。

八十一」9×9はもともと81であり、80でも82でもない。「眼横 鼻直 自天真」眼は顔の中で横長であり、鼻は縦長であることは明らかである。これらはいずれも、当然のことを言っているにすぎないのですが、当然のことを当然であると認識していくことが大切だと思っています。このような考えをもとに私の生きる姿勢を示す号として「然々」としました。繰り返すようですが、自分が置かれた位置づけの中で、当たり前のことをやっていくこと、そしてそれを楽しんでゆることが重要でしょう。茶室建築も高麗茶碗もいわば必要最小限の中の美ですが、それらの結果、同じお茶でも器を換えれば違った味がする、人間はそれほどデリケートで、そんな人間を相手にするから建築も面白いと思うんです。

#### 加藤六美

1911年愛知県生まれ  
1931年旧制第八高等学校  
1934年東京工業大学建築学科卒業  
1954年東京工業大学教授  
1968年工業材料研究所所長  
1969～73年東京工業大学学長  
1974～86年人事院人事官  
日本建築学会会長・国立大学協会会長を歴任。現在、東京工業大学名誉教授  
主な著書：「プレストレスコンクリート」「応用弾性学の基礎」



### 先輩、元気ですか⑥

Talks with well-known Alumni

## 加藤六美先生(1934年卒)を訪ねて

Visiting professor Mutsumi kato

### 東工大時代はどのような学生でしたか？

加藤 父親が亡くなったせいもあって、経済的には苦しくて、みんなが喫茶店などに行く時にほとんどついて行かなかったので、(では失敬)君とよばれていたものです。夜はほとんど外出せず、早起きして製図室の掃除をするのが私の役目で、現在も同様な習慣は変わりませんね。私たちの頃は現在の学生とは異なり、先生に教を請うというよりも、その背中を見て感じ取っていくものでした。

### 教授の他にも学長をなさった時期がありましたか、あの頃はいかがでしたか？

加藤 大学紛争の頃で、あの時は本当に東工大が潰れるかと思いました。しかし本学の教授会が非常にしっかりしていて信頼関係が強く、おかげで無事におさまったばかりでなく、その動きの中で学内の結束ができて長津田キャンパスの実現を見ることができました。

### 今の学生に対して一言。

加藤 今の若い人は以前のように一律的でなく、多様な価値判断をもっているために非常に面白いですね。デタラメだという人もいますが、デタラメの中からこそ新しいものがでてくる可能性があるのです。ただ、新しいことをやるためには、50%の失敗の可能性を含むのが当然であり、これに対して自分で責任をとっていくことが重要です。教育とは、学生の個性・能力を引き伸ばしていくことであって、型にはめていくことではなく、こうした教育が行われる場が大学なので、

インタビュアー：佐々木健夫・谷口知史  
(大学院建築学専攻修士課程)

●近代フランス建築家オーギュスト・ペレーの学位論文で滞在したパリ、そして赴任したパリ、いつまでたってもパリはパリの匂いと景観が残っている。それが赴任時の第一印象であった。もっとも初めて渡仏した時は、その都市の機能と美しさに心をうたれ、再渡仏時にはその思い出がいぜんとして、否、より美しくなっていることに感激したものである。なぜそう思うのか。移入された古代の匂いは別として、生来の古代の匂いがパリのどこにあるのかは分からないが、中世の絶対主義そして近世革命後の歴史の痕跡が、この程良い大きさの都市の中によく重にも重層し、かつ不可思議に現代のグロン・プロジェなどの固体が昇華し、再び歴史の層として融合を繰り返しているのではないか。そこには、フランス、パリそして民間を巻き込んだ伝統と革新の狭間にある深遠な哲学を基盤とした、強大で長期的維持力のある行政が、ある面で非常に評価されるべきなのであろうか。歴史は革新されていくが、革新がすべて良いわけではない。長い歴史が実証する良さものを携え、完結しない運命にある都市というものが、うまく完結する方向に向いているようにみえるのであろう。しかし、この都市でさえもいつの日にもゴールというものはない宿命がある。

●持論・持説が強くなり、総論がないかのように結論がでないという難しさを感じる反面、たぶんそれが理由であるかもしれぬが、私はある意味でフランス人に敬意を表していることに気づくことがある。彼らは非常に文化を愛する。歴史が証明するように、異文化を滅ぼし、自文

## 海外体験記 ⑥ Personal Experiences Abroad

# ヨーロッパ 歴史的建築物の保存と新築

Europe: Preservation & Renovation of Historical Buildings

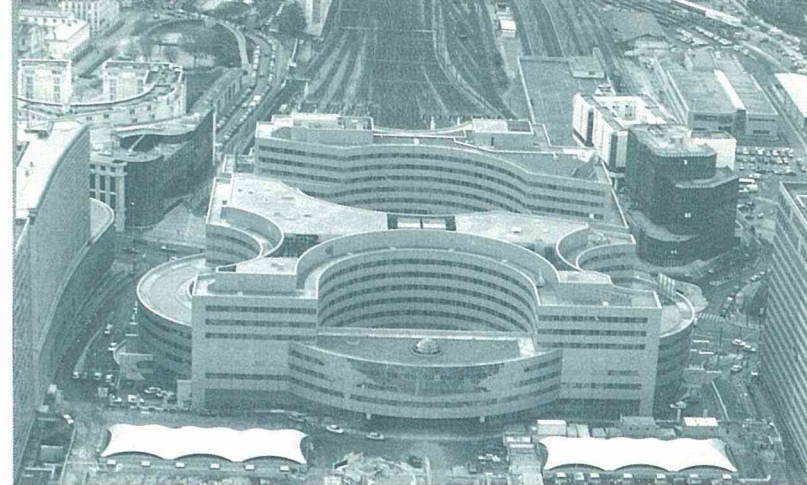
子安 孝 (大林組ヨーロッパ・ブリュッセル事務所)  
Takashi Koyasu

化を強要することにより、国および文化が生きてきた過去のあまりにも長い歴史の中で、彼らは異文化を尊重しながら自文化を育成しているように思える。米国よりさらに個人の単位でのつながりが大きいここヨーロッパでは、社会に入り込む意欲と、当り前のごとく年月をかけたつき合いが必要となる。

●さて建築文化・都市文化に対する行政をみると、東西11km南北9km、面積にして86km<sup>2</sup>のパリ市は人口200万人(首都圏で約1000万人)を擁し、市内の建物全延面積約9500万m<sup>2</sup>(地下面積を除く)は、絶対延床面積として存在し、その内訳は住居68%、オフィス17%、その他15%であり、この割合を行政的に維持することにより、活気にあふれた、華やかさが息づいている町であり続けている。したがって再開発事業においては、用途変更および既存の用途比率を変えることは、不可能に近いといえる。

●さて、そのパリに3年間滞在し、パリではモンパルナスビルとワシントンプラザビル、フランクフルトではフルステンホッフビルというそれぞれ大物件を担

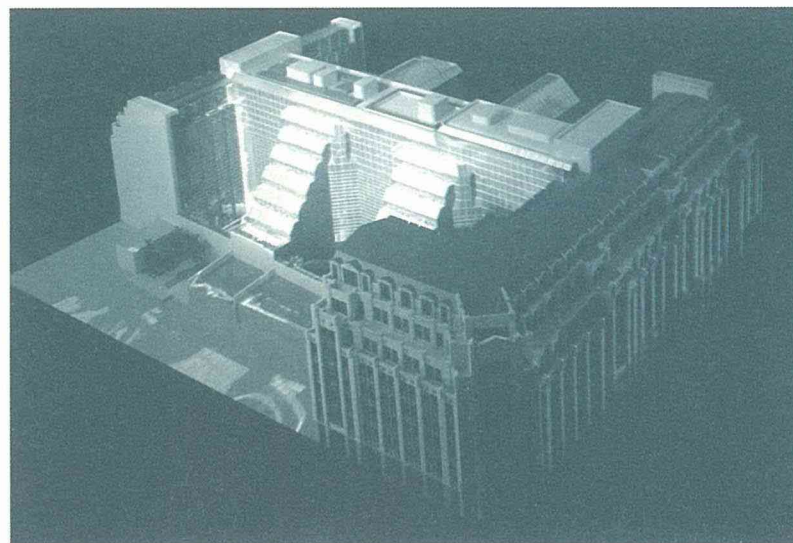
当させてもらった。モンパルナスビルに関しては、渡仏時に人間関係が十分にでき上がっており、意見がほとんど通らなかったのが実状であった。実感としてワシントンプラザおよびフルステンホッフビルは最初より参画でき、多くを成せたと感じる。ワシントンプラザは1920年竣工、外壁面はアール・デコの装飾でおおわれ、昔の外壁デザイン・コンセプトを十分保存した上での新しい試みを、国



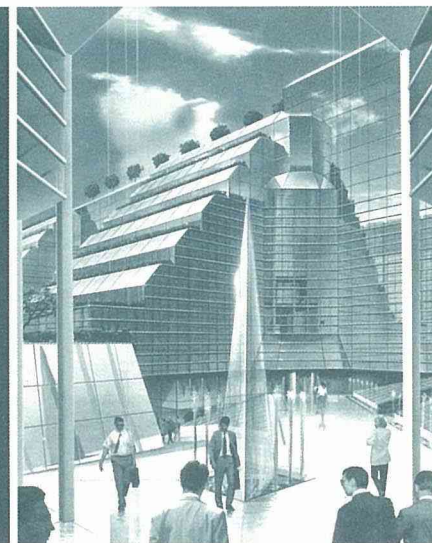
▲モンパルナスビル俯瞰 (1992年竣工)

の機関バティモン・ド・フランスがいくつかの提案の中から最終的に決定。数名の建築家は、ファサード、インテリア、建築一般と職域を分けてまとめ上げていくものであり、今秋には竣工の予定である。地上4万5000m<sup>2</sup>の延床(地下は600台駐車スペース)のこの建築は基本的に5つの棟に分けて考えることができ、5つのエントランス・デザインにフランス人とアメリカ人のインテリアアーキテクト

2人と組んだが、デザイン討論がいちばん激しかった部分として記憶に残っている。さてフルステンホッフビルは1880年竣工、ネオクラシックのファサードのみ保存し、地上8階1万5000m<sup>2</sup>と地下4階200台の駐車スペースを擁す建物で、用途も含めた設計変更前提で最初から参加した。年間で3ヵ月を超える出張となり、なかなかやり甲斐のある仕事であった。昔はホテルであったこの建物は、歴史的

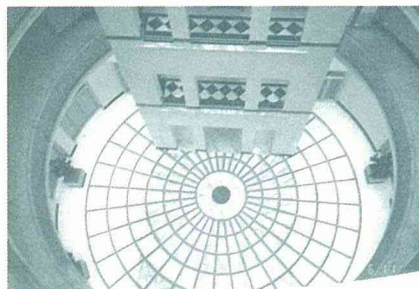


▲ワシントンプラザビルの全体模型(左)とバティオ側からみたファサードのバース(右)

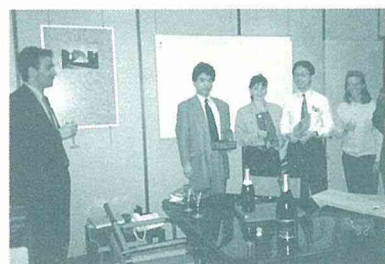


大階段があり、修復保存はその手摺も含めてリストアップされており、完全な新築建物には決してみられない大空間の階段を再現することができた。

●ヨーロッパでは、ヒストリカー・リストイド・アップ・アイテムが、ストリート・ファサードのみでなく、建築本体の中にもある場合があり、経済原則だけで考えれば、おそらく実現され得ないものが存在する。建築・都市に対して、経済を軽くみることはできないのは当然であるが、太い別軸としての建築・都市哲学が大きく覆っているということを身をもって再認識することができる。しかし、この経済と哲学の大きな2軸が、建築・都市以外の社会全般に広く深く根づき、哲学の軸が多分により太いものであることが分かる。本年4月よりブリュッセルに移ったが、これらの経験を生かし、再び飛躍できるよう頑張りたい。



▲上はフュルステンホッフビルの外観  
▲左下は内部上階より見下したロトンダ  
▶右はエントランスのインテリア



▲デザイン会議の後、左から2番目が子安氏

子安 孝 Takashi Koyasu  
1980年東京工業大学工学部建築学科卒業  
1981年ワシントン州立大学大学院建築学科留学(文部省給費)  
1983年東京工業大学理工学研究科建築学専攻課程修了  
1983年山下和正建築研究所入社  
1986年藤大林組入社  
1990年興和フランス出向  
1993年~大林ヨーロッパ・ブリュッセル事務所



本当に設計が好きですか。忙しくなるとどうしても愚痴が多くなるが、いつもこうした自問自答を繰り返している。建築設計はたいへん時間がかかり、しかも極端に労働集約的な仕事である。設計ほど割に合わない仕事はないのかもしれない。もちろんどの世界に入っても同じことで、設計だけが特に厳しいわけではない。しかし、はた目には華麗な世界に映るので始末が悪い。

建築設計はどうしても締め切りに追われることになる。どんなに小さなプロジェクトでもさまざまな立場の人が関わり、その調整に手間がかかるのがひとつの理由である。また、案を煮詰めていく過程で、種々のジレンマから、判断に迷いが生じることももうひとつの理由である。

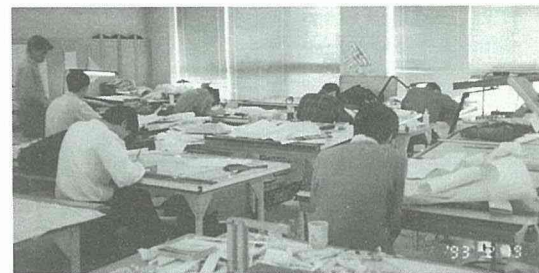
ここ数年の建築学科3年生をみると、彼らもまた締め切りに追われている。提出日の1週間前から図面を描きだす

という学生がほとんどである。教師側がいかに巧みなスケジュールを設定しても、それを守ろうとする学生はまれで、どんな長期間の課題でも最後の1週間が勝負になる。最後にまとめあげる学生のパワーはすごいが、講評会の前日に徹夜をする姿を見ていると、もう少しなんとかならないのかと思う。

彼らは物事を深く考え、そして悩むのが好きである。製図室で議論をしている姿をよく見かける。しかし、製図板に向かってスケッチをしている姿にはなかなかお目にかかれない。設計だけではなく建物の企画に関しても、何か提案をしろうという課題になると、彼らは熱中し頭をめぐらす、企画書づくりは苦手なようである。

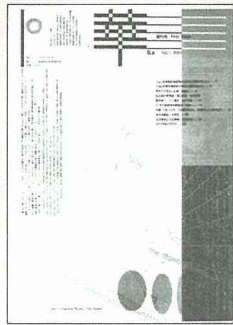
絵がへたでも、線が多少汚なくても建物の設計者にはなれる。プレゼンテーションの技術も重要だが、それよりも問題点や課題を整理しまとめ上げる力や、新しいアイデアを発想する創造力のほうがより重要である。このことは確かだが、設計競技の審査にみられるように、設計に対する評価は、途中の過程より最後に提出された図面となるのが世の常である。

説明が不十分でも見る人が見れば分かるはずだ、というのが彼らのいい分なのだろうか。しかし、いくら思考をめぐらしても、人に伝わらなければ、その努力が無駄になる。このことを銘記し、勝利への逆算ができるような過程を歩んでほしいと私は願っている。

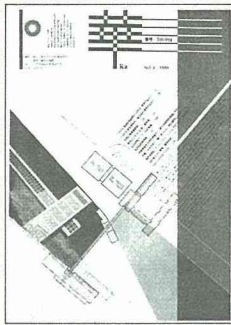


卒業設計提出5日前の製図室

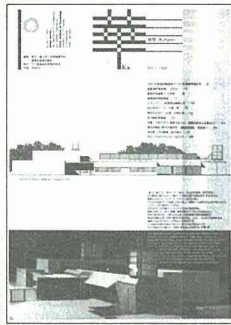
\*「華Ka」バックナンバーは南洋堂書店 (☎3291-1338) で扱っております。



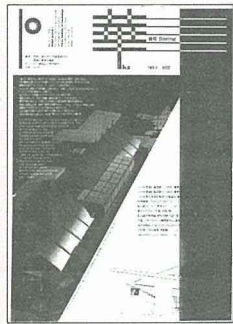
**NO1**——設計製図第Ⅲ(3年生)優秀作品 講評:仙田満・山本理顕・入江経一 卒業設計(4年生)優秀作品 東京工大生だった頃:林昌二 私の設計教育論:滝口克己・谷口汎邦・藤井修二・三上眞正・山下和正 A.キラ教授特別講演会 先輩,元氣ですか:三栖邦博・高橋寛 海外体験記:水野元



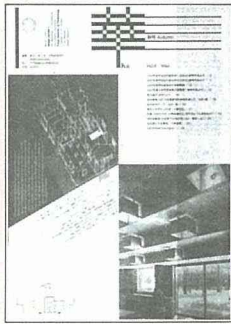
**NO2**——設計製図第Ⅳ(3年生)優秀作品 講評:長谷川逸子・八束はじめ・林昌二 卒業制作・修士制作優秀作品 東京工大生だった頃:清家清 私の研究テーマ:志水英樹 私の設計教育論:藍澤宏・青木義次・坂本一成・内藤昌・和田章 都市再開発計画論:伊達美徳 先輩,元氣ですか:藤江澄夫・西村博司 海外体験記:持田英明



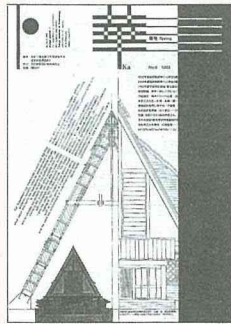
**NO3**——設計製図第Ⅲ(3年生)優秀作品 講評:トム・ヘネガン・松永安光・石井修 設計製図第Ⅰ(1年生)優秀作品 建築史特論第2(大学院) 設計製図概論:林雅子 G.S.ゴラニー教授特別講義 私の研究テーマ:内藤昌 東京工大生だった頃:戸尾任宏 私の設計教育論:小野英哲・志水英樹・時松孝次・藤岡洋保・古村福次郎 先輩,元氣ですか:瀬尾文彰・武田光史 海外体験記:安田幸一



**NO4**——設計製図第Ⅳ(3年生)優秀作品 講評:A.P.リアーズ・藤本昌也・小倉善明 卒業設計製図・卒業制作・修士制作優秀作品 特別寄稿:A.P.リアーズ 私の研究テーマ:宮本文人 東京工大生だった頃:中島隆 私の設計教育論:紀谷文樹・仙田満・茶谷正洋・宮本文人・八木幸二 先輩,元氣ですか:工藤国雄・桑原立即 海外体験記:柳沢潤



**NO5**——設計製図第Ⅰ(2年生)優秀作品 設計製図第Ⅲ(3年生)優秀作品 講評:松永安光 設計製図概論:門田家平・林雅子 大学院建築意匠演習第Ⅰ優秀作品 特別寄稿:神田駿 私の研究テーマ:仙田満 東京工大生だった頃:三輪正弘 先輩,元氣ですか:大熊喜昌・荒木正彦 海外体験記:藤田一紀



**NO6**——設計製図第Ⅱ(2年生)優秀作品 設計製図第Ⅲ(3年生)優秀作品 講評:W.デューリング・小倉善明・藤本昌也 卒業設計製図・修士論文(制作)優秀作品 特別寄稿:W.デューリング 作品紹介:柿本テルソル山莊 東京工大生だった頃:後藤一雄 建築設計教育に寄せる:中島隆・林昌二・戸尾任宏・山下和正 先輩,元氣ですか:高浜和秀・加藤六美 海外体験記:子安孝

### 第5回運営委員会の報告

1992年12月18日, 中島隆・林昌二・戸尾任宏・山下和正・仙田満の各氏出席のもとに開かれ, 下記の事項を行った。  
①1991年度決算報告の承認 ②建築設計教育および本会のあり方について意見交換。

### 第6回運営委員会の報告

1993年4月27日, 中島隆・林昌二・戸尾任宏・山下和正・仙田満・小野英哲(前委員)の各氏出席のもとに開かれ, 下記の事項を審議した。①TIT建築設計教育研究会の継続について。②次回運営委員会について。

### 第7回運営委員会の報告

1993年5月24日, 中島隆・林昌二・戸尾任宏・山下和正・仙田満・小野英哲(前委員)の各氏出席のもと, 本会のあり方について審議を行った。

### 第8回運営委員会の報告

1993年6月8日, 中島隆・林昌二・戸尾任宏・山下和正・仙田満・小野英哲(前委員)の各氏出席のもと, 本会のあり方について審議を行った。また本年度総会の日程を決定した。

### 計画系人事異動

内藤昌教授: 1993年3月31日付で建築

計画第1講座教授より定年退官。  
山下和正教授: 1993年3月31日付で建築計画第2講座教授より退職。  
前田哲男助手: 1993年4月1日付で建築計画第2講座助手より山口女子大学助教に異動。

### 大岡山建築賞決定

1992年度の大岡山建築賞は以下の受賞者に決定した。

●卒業設計製図

足立真(坂本研究室)

「お台場埋め立て地開発計画」

鈴木智朗(志水研究室)

「横浜芸術プラザ」計画

●修士論文(制作)

佐々木健夫(山下研究室)

「分散配置・廻遊形式による美術館計画」

### 編集後記

本年3月末をもって, 3年少々勤めた建築計画第2講座教授の職を退かせていただきました。幸い仙田満教授を中心に本誌の編集を含めた本会の活動を引き継いでいただけることとなり, ほんとはしています。今までに多くの方々から励ましのお手紙をいただき, ひとつひとつ返事を差し上げていませんでしたが, 永い間ご愛読いただいた方々と合わせて, お礼を申し上げたいと思います。今後ともご支援のほど, お願い申し上げます。(山下和正)

華Ka No.6 1993年6月30日発行  
発行: TIT建築設計教育研究会

(事務局: 〒151 東京都渋谷区千駄谷2-10-7 山下和正建築研究所内)

編集: 山下和正・前田哲男(東京工業大学工学部建築学科建築計画第2講座)

仙田満(建築材料講座(建築設計基礎))

編集協力: 宍井編集室

翻訳: デビット・スチュワート

取材協力: 大学院建築学科修士有志

印刷: 三共グラフィック株

Editor.

Yamashita Lab./Senda Lab.

Department of Architecture and

Building Engineering

Tokyo Institute of Technology

2-12-1 O-okayama Meguro-ku,

Tokyo 〒152

phone 03-3726-1111 ex. 3167

Translation: David Stewart